静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告　第135集

小鹿杉本堀合坪遺跡Ⅱ

平成13年度 富士白団地埋蔵文化財発掘調査報告書

２００２

財団法人 静岡県埋蔵文化財調査研究所

静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告　第135集

小鹿杉本堀合坪遺跡Ⅱ

平成13年度 富士白団地埋蔵文化財発掘調査報告書

２００２

財団法人 静岡県埋蔵文化財調査研究所

序

財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所では、県営富士白団地１期建設工事に伴い、平成14年４月から５月にかけて小鹿杉本堀合坪遺跡の発掘調査を実施し、本報告書を世に送り出すこととなった。

想起すれば、当研究所では静岡平野において静清バイパスや静岡県コンベンションセンター『グランシップ』の建設に伴い埋蔵文化財発掘調査を手掛け、数多くの地域史を塗り替える成果を得てきた。そのなかでも特に方形に区画された古代条里地割りの発見、さらにはその東西基準線となる古代東海道の検出は、古代律令国家形成期の歴史のロマンを呼び起こし、全国的にも大きな話題となった。さらに平成６年度には県立短期大学の建設に伴う調査において静岡平野南部地域でも条里地割りが平安時代に施工されていたことが明らかとなった。

一方、弥生時代の調査や研究も継続しており、最近では国特別史跡「登呂遺跡」再整備に伴う調査や静岡平野を代表する中期の「有東遺跡」においても28次にわたる調査が継続され、当地域の弥生社会の解明がすすめられている。

今回の調査は、小規模であったが、弥生時代後期後葉の竪穴状遺構を検出することができ、この結果から周辺には集落域が存在すると想定される。静清平野では弥生時代後期に入ると集落数は増加するが、今回の調査成果は曲金微高地の南端部分にも集落が展開することを示しており、今後、静岡平野南部地域の歴史解明が進展することが期待される。

最後に、調査並びに報告書作成に当たっては、静岡県教育委員会文化課、静岡県静岡土木事務所、静岡市教育委員会等の関係諸機関各位に感謝するとともに、現地調査に参加した調査員・作業員の労苦をねぎらいたい。

2002年10月

財団法人　静岡県埋蔵文化財調査研究所

所　長　　斎　藤　　忠

例　　言

1．本書は、静岡県静岡市小鹿２丁目506-1に所在する小鹿杉本堀合坪遺跡Ⅱの発掘調査報告書である。

2．調査は、平成13年度　富士白団地埋蔵文化財発掘調査として、静岡県静岡土木事務所の委託を受け、静岡県教育委員会文化課の指導のもとに、財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所が平成14年４月から平成14年５月まで現地調査を実施した。資料整理は平成14年６月から平成14年10月まで行った。

3．調査体制は次のとおりである。

平成14年度　所長　斎藤　忠　　副所長　飯田英夫

常務理事兼総務部長　粂田徳幸　　総務課長　本杉昭一　　会計係長　大橋　薫

調査研究部長　山本昇平　　調査研究部次長　栗野克巳

調査研究部次長兼調査研究二課長　佐野五十三　　調査研究員　井鍋誉之

4．本書の国家座標値は日本測地系を用い、現地での基準点測量は㈱フジヤマに委託した。グリッド番号の呼称は平成６年度に調査した小鹿杉本堀合坪遺跡のグリッド配置図に準じた。

5．遺物実測図の縮尺は土器が1/3、木製品、石製品が1/2・1/4で統一をはかった。

6．木製品の保存処理、遺物の写真撮影は当研究所職員が行った。

7．発掘調査資料は、静岡県教育委員会が保管する。

8．本書の執筆は、調査研究員　井鍋誉之が行った。

9．本書の編集は、財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所が行った。

10．発掘調査及び報告書作成に当たっては静岡県静岡土木事務所、静岡市教育委員会の方々には特にご協力いただいた。深く感謝する次第である。

目　　次

序
例言
第Ⅰ章　調査の概要 …… 1
　第１節　調査に至る経緯 …… 1
　第２節　調査の方法 …… 2
　第３節　調査の経過 …… 3

第Ⅱ章　位置と環境 …… 5
　第１節　地理的環境 …… 5
　第２節　歴史的環境 …… 6
　第３節　基本層序 …… 9

第Ⅲ章　遺構と遺物 …… 11
　第１節　検出遺構と出土遺物 …… 11
　　１　竪穴状遺構 …… 12
　　２　竪穴状遺構内出土土器 …… 13
　　３　竪穴状遺構内出土木製品 …… 15
　第２節　包含層出土遺物 …… 17
　　１　土器 …… 17
　　２　石製品 …… 27

第Ⅳ章　まとめ …… 29

写真図版

挿図目次

第１図　遺跡位置図 …… 1
第２図　調査地点配置図 …… 2
第３図　グリッド配置図 …… 4
第４図　周辺地質図 …… 5
第５図　遺跡分布図 …… 7
第６図　基本土層図 …… 9
第７図　調査範囲図 …… 11
第８図　遺構全体図 …… 12
第９図　竪穴状遺構実測図 …… 13
第10図　竪穴状遺構出土土器実測図(1) …… 13

第11図　竪穴状遺構出土土器実測図(2) …… 14
第12図　竪穴状遺構出土木製品実測図 …… 16
第13図　包含層出土土器実測図(1) …… 18
第14図　包含層出土土器実測図(2) …… 19
第15図　包含層出土土器実測図(3) …… 20
第16図　包含層出土土器実測図(4) …… 21
第17図　包含層出土土器実測図(5) …… 23
第18図　包含層出土土器実測図(6) …… 24
第19図　包含層出土石製品実測図 …… 27

挿表目次

表１　調査工程表 …… 3
表２　遺跡地名表 …… 8
表３　出土木製品計測表 …… 15
表４　出土土器観察表(1) …… 25
表５　出土土器観察表(2) …… 26
表６　出土石製品計測表 …… 28

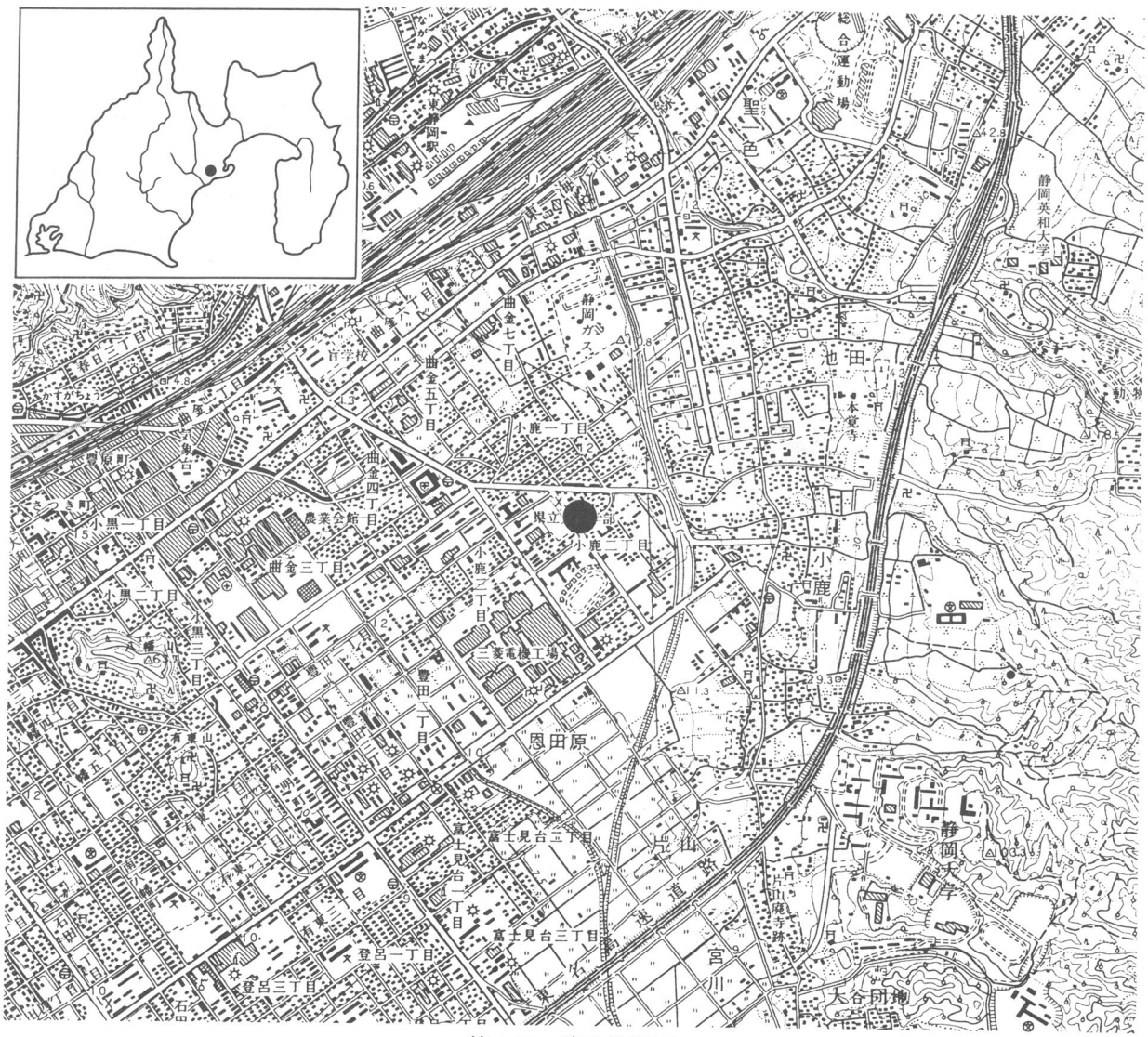
図版目次

図版１　１　遺跡遠景（東より）　２　調査前全景（北より）
図版２　１　調査区全景（北より）　２　包含層遺物出土状況（北より）
　　３　包含層遺物出土状況（北より）　４　包含層遺物出土状況（北より）
　　５　包含層遺物出土状況（北より）
図版３　１　調査区完掘状況（北より）　２　竪穴状遺構土層断面（東より）
図版４　１　竪穴状遺構遺物出土状況（南東より）　２　竪穴状遺構完掘状況（北より）
図版５　出土土器(1)
図版６　出土土器(2)
図版７　出土土器(3)
図版８　出土土器(4)
図版９　出土土器(5)
図版10　出土土器(6)
図版11　出土土器(7)
図版12　出土木製品
図版13　出土石製品

第Ⅰ章　調査の概要

第１節　調査に至る経緯

県営富士白団地は昭和30年代に建設され、築40年以上が経過しており、老朽化が進んでいる。このため、この団地内で建て替えることとなり、４階建の共同住宅を建設することとなった。共同住宅建設予定地内には、西に平安時代の水田跡、井戸跡が検出された小鹿杉本堀合坪遺跡、南に約100mには小鹿蟹田堀合坪遺跡が存在し、埋蔵文化財包蔵地の可能性が考えられた。こうした状況の中、静岡県教育委員会文化課の指導のもと、平成13年11月５日から静岡市教育委員会によりテストピット２箇所を設定し、土層の堆積状況、遺構の有無を確認する調査が実施された。その結果、建設予定地内には弥生時代～古墳時代の遺構、遺物が確認され、静岡県静岡土木事務所の委託を受け、静岡県教育委員会文化課の指導のもとに、財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所が本調査を実施することになった。調査面積は105㎡で、平成14年４月～５月にかけて現地調査を実施した。



第１図　遺跡位置図

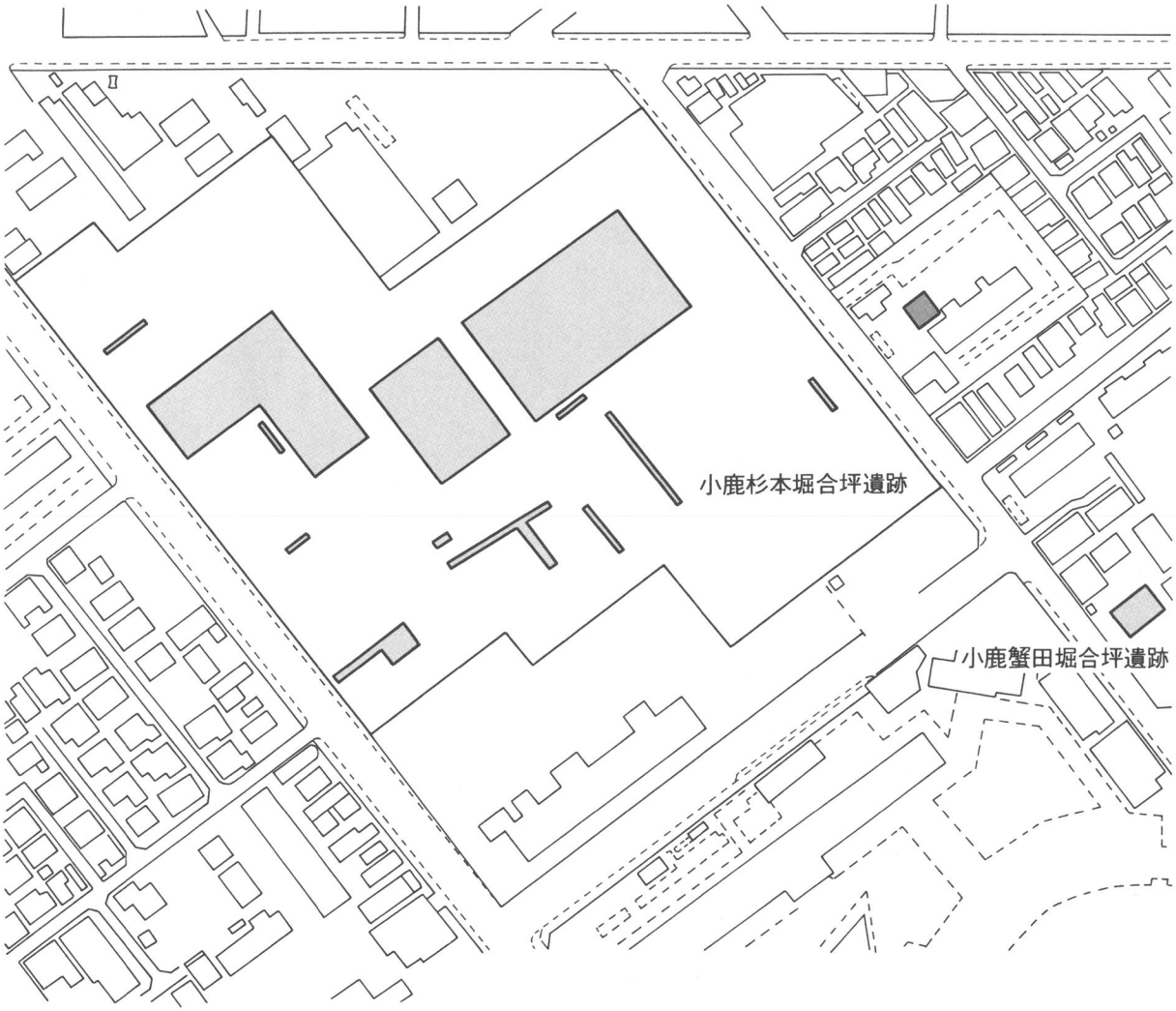
第２節　調査の方法

調査対象区には国家座標に合わせて、10m方眼のグリッドを設定した。グリッドの呼称は平成６年度に調査した小鹿杉本堀合坪遺跡のグリッド配置図に準じた。

調査区は団地内にあるため、周囲を安全フェンスで囲い、安全確保に努めた。また低湿地の遺跡であり、湧水や雨水による冠水・水没も予想されたため、排水溝、集水桝、水中ポンプを設置し、壁面の崩落防止など周囲への影響が出ないように十分配慮しながら、排水作業を行った。掘削深度が３mに及ぶため、調査区壁面は60度の角度をつけて掘削し、ブルーシートで被覆した。土砂の運搬にはベルトコンベアを使用した。

調査開始時における表土除去作業は、0.25㎥のバックフォーを使用し、この時、生じた排土は４ﾄﾝダンプにより場外へ搬出した。また中間層除去作業もバックフォーを使用した。遺物包含層は人力で掘削作業が行われた。

平面図及び土層図は、縮尺1/20を基本とし、遺物出土状況図などの詳細図は、縮尺1/10で作成した。写真撮影は、工程記録用として35㎜カラーネガ、遺構写真は６×７判モノクロ・カラーリバーサルを使用し、全景写真は４×５判カメラを用いた。出土遺物は層位別、遺構別に取り上げ、土器、石製品、木製品ごとに分け台帳に登録した。



第２図　調査地点配置図

第３節　調査の経過

現地調査

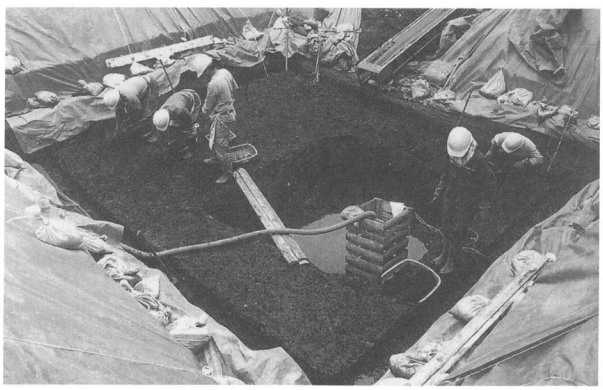
平成14年４月３日より調査の準備作業をすすめ、４月10日より0.25㎥のバックフォーを使用し、表土除去を行った。この時に生じた排土は４ﾄﾝダンプにて場外搬出した。平成６年度に県立短期大学建設に伴う発掘調査で、条里水田の坪界線が確認されており、Ⅰ層で水田遺構の検出を試みたが、今回の調査区では確認されなかった。

５月の連休中には作業員による現地安全パトロールを実施した。５月第１週は0.25㎥のバックフォーを使用し、中間層の除去を行い、Ⅵ層上面まで掘り下げた。確認調査においてⅦ層は古墳時代中期～前期の水田耕作土の可能性が指摘されていたが、明確な水田遺構は検出されなかった。

第２週から第３週にかけて、弥生時代後期の遺物包含層であるⅧ層、Ⅸ層の人力掘削を行った。包含層遺物はテンバコにして５箱の量が出土した。Ⅹ層上面で遺構検出を行い、小穴２基、西壁で竪穴状遺構を検出した。竪穴状遺構からは土器、炭化した木製品が出土している。

第４週は調査区全景、遺構内遺物出土状況などの写真撮影作業を行った。また、遺構平面図、断面図、土層図などの実測作業を行い、５月29日には現地作業を終了した。

表土除去作業



人力掘削作業

表１　調査工程表

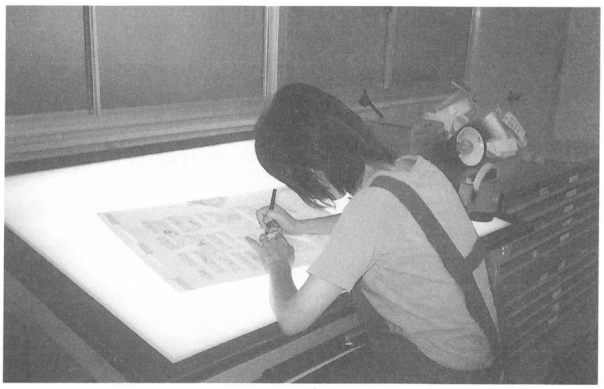
	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月
準備・撤去工							
本調査							
資料整理・報告書作成							
報告書校正・事務処理							

資料整理

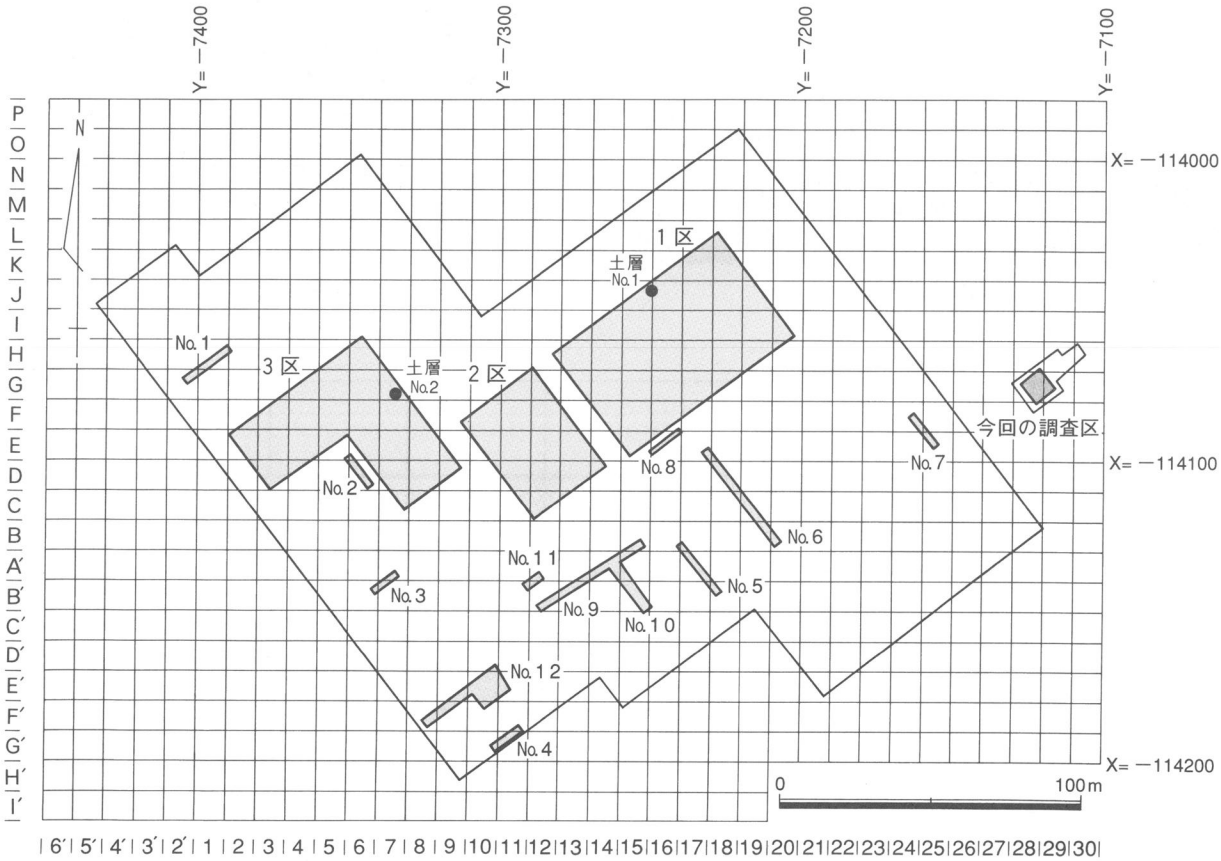
６月より本部にて本格的な資料整理作業を行った。注記作業の終了した土師器、弥生土器については分類、接合作業を行った。この時点で、実測可能な土器を抽出し、復原できる土器は石膏入れ作業をすすめた。また、現地で作成した図面の整理、報告書に掲載する遺構図版下を作成した。木製品については清水の江尻台事務所にて実測作業を行い、次に写真撮影、その後保存処理を行った。

実測作業の終了した遺物は写真撮影作業、遺物図のトレース作業を行い、報告書掲載用の図版を作成した。この一連の作業を終えたものについては１点の遺物に対してカードを作成し、出土遺構、法量、図面番号、挿図番号などのデータを記入した。カードに記載された項目については、パソコンに入力し、必要に応じて検索できるようにデータベース化をはかった。遺物についてはテンバコに収納し、報告書掲載遺物は挿図番号順に、それ以外は登録番号順に収納した。併せて収納台帳を作成し、必要な際はすぐに取り出せるようにしている。

土器復元作業



トレース作業



第３図　グリッド配置図

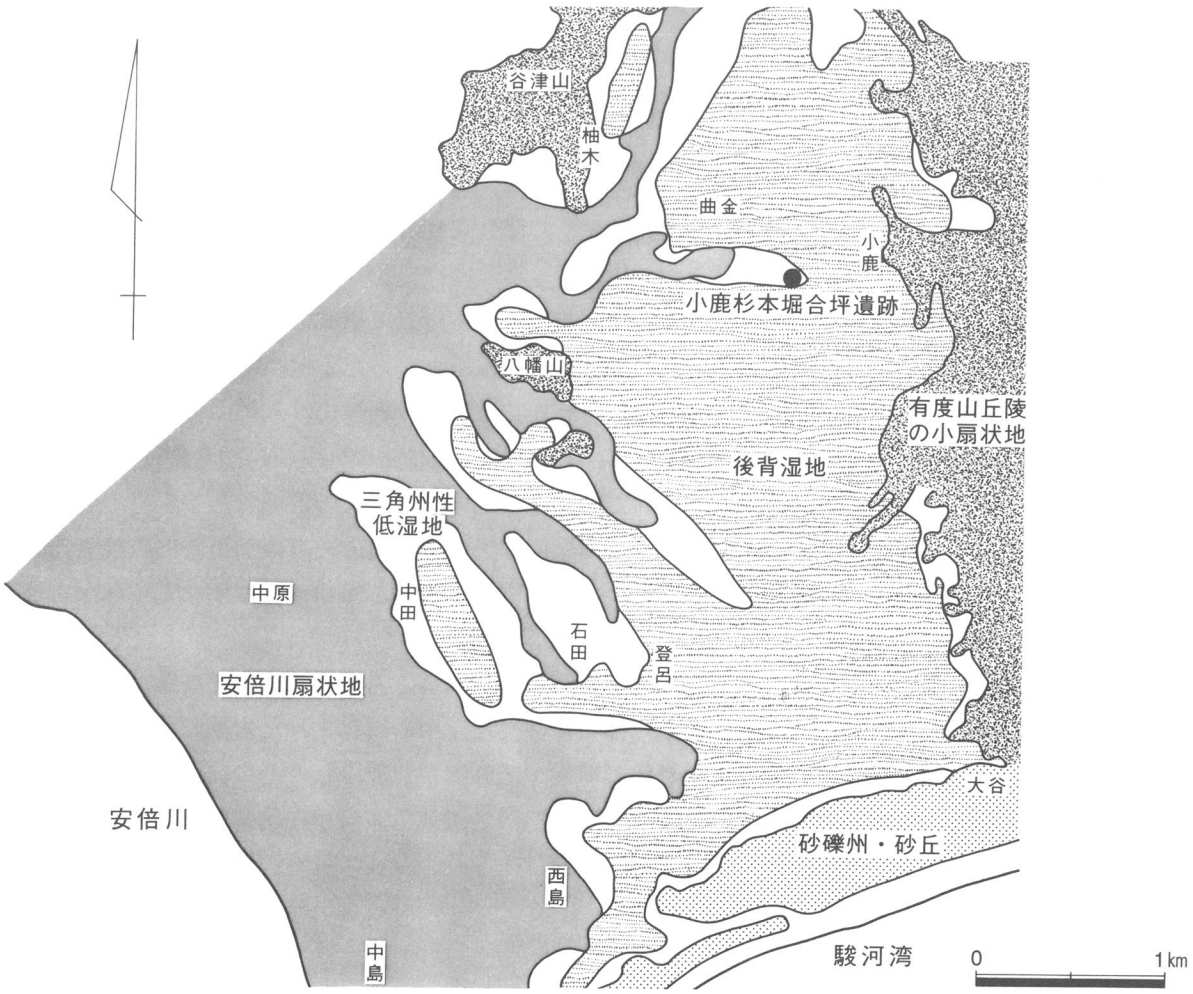
第Ⅱ章　位置と環境

第１節　地理的環境

小鹿杉本堀合坪遺跡は静岡市小鹿２丁目506-1に所在し、周辺には三菱電機静岡工場、県立短期大学、済生会病院などがある。かつては水田や畑地が広がっていたが、近年の都市化に伴い、住宅、公共施設、工場などの密集地帯となっている。

遺跡の存在する静岡平野は、安倍川、藁科川の堆積作用により形成された沖積平野である。北は竜爪山、賤機山、西に高草山、東は有度山により囲まれ、南は駿河湾に向けて開けている。

静岡市街地の西側を流れる安倍川は、天竜川や大井川などと同じように「東海型河川」と呼ばれ、急流大河川で、暴れ川である。この安倍川が流路変遷を繰り返しながら形成した安倍川扇状地は、浅間神社付近の標高27m辺りを扇頂とし、北から南にかけて低く傾斜し、末端部は標高８mの高さとなっている。平野部には谷津山や八幡山などの独立丘が存在するため、扇状地堆積物の東側への張り出しが規制され、安倍川や藁科川の氾濫の繰り返しによりこの丘陵の両端、隙間には北西から南東にかけてのいくつもの微高地、低湿地を形成し、複雑な地形をなしている。現在、静岡平野には南から中田、石田、富士見、久能街道、小黒、曲金、長沼、千代田、北安東の微高地が確認されている。谷津山と八幡山の間隙には曲金から小鹿を結ぶ微高地が形成されており、遺跡はこの微高地の南側縁辺部に位置する。



第４図　周辺地質図（加藤 1983）

第２節　歴史的環境

小鹿杉本堀合坪遺跡の所在する静岡市内の遺跡は、静岡平野および平野縁辺の丘陵に多く分布している。まず小鹿周辺の調査歴を簡単にまとめる。平成６年度、当研究所により、静岡県立短期大学部静岡校の建設に伴い、今回の調査区の西側にあたる小鹿杉本堀合坪遺跡（曲金東遺跡）の発掘調査が行われている。調査の結果、表層条里から復原した条里地割と坪界線と推定される疑似畦畔が一致し、静清平野南部における埋没条里も北部同様に表層条里と一致する広域条里型であった事が確認された。他にも多くの溝状遺構が検出されており、その主軸方位からそれらの溝は、坪内部の地割方向に規制された水田耕作に関わるものと考えられる。また、集落関連遺構として井戸や土坑が検出されており、坪界線付近を境に水田域と集落域に分けられていた可能性が指摘されている。遺物の出土が少なく、年代の検討は困難であるが、井戸から出土した灰釉皿から９世紀後半を初現とし、その他の土器から11世紀末まで継続すると考えられる。

さらに今回の調査区から南東へ100ｍの地点で当研究所による小鹿蟹田堀合坪遺跡の調査が平成６年度に行われており、平安時代から中世にかけての畦畔を確認している。

静岡平野では弥生時代中期以降、多くの遺跡が発見されている。弥生時代の遺跡は安倍川扇状地の微高地に集落を営み、その周辺に広がる後背湿地に水田経営を行う状況を呈している。中期前葉の遺跡としては丸子セイゾウ山、佐渡山遺跡など山地、丘陵のみで確認されている。中期中葉に入ると有東遺跡、駿府城内遺跡、川合遺跡など平野部で遺跡が確認されるようになる。

その平野南部の有東遺跡は、久能街道微高地上に広がる遺跡である。弥生時代中期中葉から始まるとされ、拠点的集落のひとつと考えられる。その他、国指定特別史跡である登呂遺跡、汐入遺跡、小黒遺跡、有明遺跡などは有東遺跡周辺で弥生時代後期の遺跡として点在している。

小黒遺跡は有東遺跡の北西の小黒微高地上に立地する遺跡であり、住居跡が検出されている。その南東では豊田遺跡が所在し、住居跡、掘立柱建物跡、溝状遺構、畦畔が見つかっている。曲金Ａ遺跡は曲金微高地上に立地する遺跡で、曲金式土器の標式遺跡として知られており、規模の大きい集落と考えられるが、詳細は不明である。

このように弥生後期に至っては遺跡数が増加している。また中期以来墓域として利用していた部分の大半が後期に至っては水田として利用されており、墓域から水田といった土地利用の変化が伺える。

古墳時代に入ると静岡平野周辺においては平野を取り巻く丘陵部や谷津山、八幡山の孤立丘に多くの古墳群が分布する。中でも谷津山丘陵上に所在する谷津山１号墳（柚木山神古墳）は全長110ｍを測る前方後円墳であり、４世紀後半代の築造と考えられている。本地域では最大の古墳である。その他、清水市牛王堂山古墳、三池平古墳、神明山１号墳など有力な前方後円墳、前方後方墳が平野内の独立丘陵に造られている。中期後半以降は静岡市マルセッコウ古墳、一本松古墳、諏訪神社古墳など主要な古墳が平野を取り囲む丘陵の尾根に存在する。

古墳時代の集落は明確ではないが、多くは弥生時代から続く遺跡と考えられ、豊田遺跡、小黒遺跡、曲金Ａ遺跡などが想定される。特に小黒遺跡は八幡山の微高地を中心に営まれた古墳時代前期の拠点的な集落跡である。居住域と水田域の間には土塁状の遺構や区画溝が配置され、その区画内には棟持柱建物跡が検出されている。古墳時代の水田跡は曲金北遺跡、瀬名遺跡、駿府城内遺跡などで見つかっている。しかしながら集落遺跡、水田以外の生産遺跡の資料は少なく、今後の資料の増加が待たれるところである。

第５図　遺跡分布図

表２　遺跡地名表

番号	遺　跡　名	時　代	種　別	番号	遺　跡　名	時　代	種　別
1	小鹿杉本堀合坪遺跡	弥生（後）古代～中世	集落・水田	36	宮川古墳群	古墳（後）	横穴式石室
2	小鹿蟹田堀合坪遺跡	古代～中世	水田	37	宮川遺跡	旧石器～古代	集落・散布地
3	曲金A遺跡	弥生～古墳	集落	38	片山遺跡	弥生（後）古墳、近世	集落・散布地
4	曲金北遺跡	弥生～平安	道・水田	39	片山廃寺	古代	寺院
5	曲金Ｂ遺跡	古墳～古代	集落・官	40	白山神社古墳	古墳（後）	横穴式石室
6	三菱工場内遺跡	古代	散布地	41	静岡大学構内古墳群	古墳（後）	横穴式石室
7	豊田遺跡	弥生（中）～古墳（前）	集落・水田・墓	42	大段Ⅱ遺跡	縄文（中）	散布地
8	小黒遺跡	弥生（後）～古墳（前）	集落・水田	43	大段Ⅰ遺跡	旧石器	散布地
9	有東遺跡	弥生（中・後）古墳、中世	集落・水田・墓	44	大段Ⅲ遺跡	縄文	散布地
10	有明遺跡	弥生（後）	集落	45	さそく段古墳	古墳（後）	古墳
11	有東砦跡	中世	城館	46	ささご段遺跡	縄文	散布地
12	八幡山古墳群	古墳（後）	横穴式石室	47	堀ノ内山遺跡	弥生	散布地
13	八幡山城跡	中世	城館	48	小鹿古墳群	古墳（後）	横穴式石室
14	女子商校遺跡	弥生（後）	集落	49	堀ノ内Ｂ遺跡	弥生	集落
15	八幡５丁目遺跡	古墳（中）、中世～近世	集落・水田	50	堀ノ内山奥古墳	古墳（後）	横穴式石室
16	ケイセイ遺跡	奈良～近世	集落・水田	51	堀ノ内Ａ遺跡	縄文（中）	集落、墓
17	鷹ノ道遺跡	弥生（中）～古墳（中）、平安	集落・水田・墓	52	本覚寺裏遺跡	縄文	散布地
18	南消防署内遺跡	弥生・古墳	集落・水田	53	門前坪古墳	古墳（後）	横穴式石室
19	登呂遺跡	弥生（後）古墳	集落・水田	54	池田丸山古墳	古墳（後）	横穴式石室
20	天神森遺跡	古墳	散布地	55	池田山古墳群	古墳（後）	横穴式石室
21	水洗遺跡	弥生（後）～古墳（前）	集落	56	大原坪遺跡	縄文	集落
22	下島遺跡	弥生・古墳	散布地	57	寺ノ久保遺跡	弥生、古墳、中世	集落
23	汐入遺跡	弥生（後）～古墳（中）、中世	集落	58	栗原遺跡	弥生	集落
24	元宮川神明原遺跡	縄文（後）～中世	集落・祭祀	59	道下遺跡	弥生	散布地
25	蛭田遺跡	縄文（後）	集落	60	吉ノ口坪遺跡	弥生	散布地
26	東大谷古墳群	古墳（後）	横穴式石室	61	長沼遺跡	弥生～古墳、中世	水田
27	上ノ山遺跡	縄文～古墳	集落・古墳	62	棚田遺跡	中世	集落？
28	日向山古墳	古墳（後）	古墳（横穴式石室）	63	長沼古城	中世	城館
29	井庄段遺跡	縄文・弥生	集落・散布地	64	茶臼山古墳	古墳（後）	古墳
30	井庄段古墳群	古墳（後）	横穴式石室	65	千代田遺跡	弥生	散布地
31	伊庄谷南谷横穴群	古墳（後）	横穴	66	井上邸古墳	古墳（後）	横穴式石室
32	伊庄谷北谷横穴群	古墳（後）	横穴	67	愛宕山城	弥生（後）～古墳（前）中世	集落・城館
33	片山横穴群	古墳（後）	横穴	68	柚木瓦窯	古代	古窯
34	清泉寺窪遺跡	縄文	散布地	69	谷津山古墳群	古墳（前）、古墳（後）	前方後円墳
35	清泉寺窪瓦窯	古代	古窯				

参考文献

日本考古学協会1949『登呂（前編）』
日本考古学協会1954『登呂（本編）』
静岡市教育委員会1982『駿河・豊田遺跡』
静岡県教育委員会1983『有東遺跡』
静岡市教育委員会1987『有東梔子遺跡』
㈶静岡県埋蔵文化財調査研究所1989『大谷川Ⅳ』
静岡市教育委員会1993『ふちゅーるNo.１』平成３年度静岡市文化財年報
静岡市教育委員会1994『ふちゅーるNo.２』平成４年度静岡市文化財年報
㈶静岡県埋蔵文化財調査研究所1994『瀬名遺跡Ⅲ』
㈶静岡県埋蔵文化財調査研究所1994『長崎遺跡Ⅲ』
静岡市教育委員会1995『ふちゅーるNo.３』平成５年度静岡市文化財年報
㈶静岡県埋蔵文化財調査研究所1995『長崎遺跡Ⅳ』
静岡市教育委員会1996『ふちゅーるNo.４』平成６年度静岡市文化財年報
静岡市教育委員会1996『鷹ノ道遺跡』
㈶静岡県埋蔵文化財調査研究所1996『小鹿杉本堀合坪遺跡』
静岡市教育委員会1997『ふちゅーるNo.５』平成７年度静岡市文化財年報
㈶静岡県埋蔵文化財調査研究所1997『曲金北遺跡』
静岡市教育委員会1998『ふちゅーるNo.６』平成８年度静岡市文化財年報
静岡市教育委員会1998『有東遺跡第14次発掘調査報告書』
静岡市教育委員会1998『有東遺跡第16次発掘調査報告書』
㈶静岡県埋蔵文化財調査研究所1998『瀬名川遺跡』
静岡市教育委員会1999『ふちゅーるNo.７』平成９年度静岡市文化財年報
静岡市教育委員会2000『ふちゅーるNo.８』平成10年度静岡市文化財年報
静岡市教育委員会2000『特別史跡登呂遺跡発掘調査概要報告書』
静岡市教育委員会2001『ふちゅーるNo.９』平成11年度静岡市文化財年報
静岡市教育委員会2001『特別史跡登呂遺跡発掘調査概要報告書』
静岡市教育委員会2002『長沼遺跡発掘調査報告書』

第３節　基本層序

小鹿杉本堀合坪遺跡の基本層序は、県立短期大学建設に伴う小鹿杉本堀合坪遺跡の１次・２次調査の成果を基本にしており、整合性をもたせている。名称については過去の調査との混乱を避けるためローマ数字を使用し細分についてはａ・ｂとアルファベットを付した。また、砂・シルトの互層といった自然堆積層に関しては大まかに捉えることとした。今回の調査では標高10.8mを測る現地表面から約３ｍ下までの土層堆積状況を確認した。

第Ⅰ層　灰褐色シルト

粘性が強く、しまりがある。層厚は30cmで、炭酸鉄のブロックが認められた。

第Ⅱ層　灰色粗砂

灰色の中粒～粗粒の砂で、しまりはややある。

第Ⅲ層　灰色シルト・砂

灰色の粗い砂と灰白色のシルト～細砂の互層である。

第Ⅳ層　暗青灰色粗砂

粗い粒子の砂で、混入物はほとんど含まない。

第Ⅴ層　暗青灰色シルト・砂

粘性は強く、しまりはやや弱い。

第Ⅵ層　暗オリーブ灰色粘土

粘性は強く、しまりは弱い。

第Ⅶ層　暗青灰色粘土

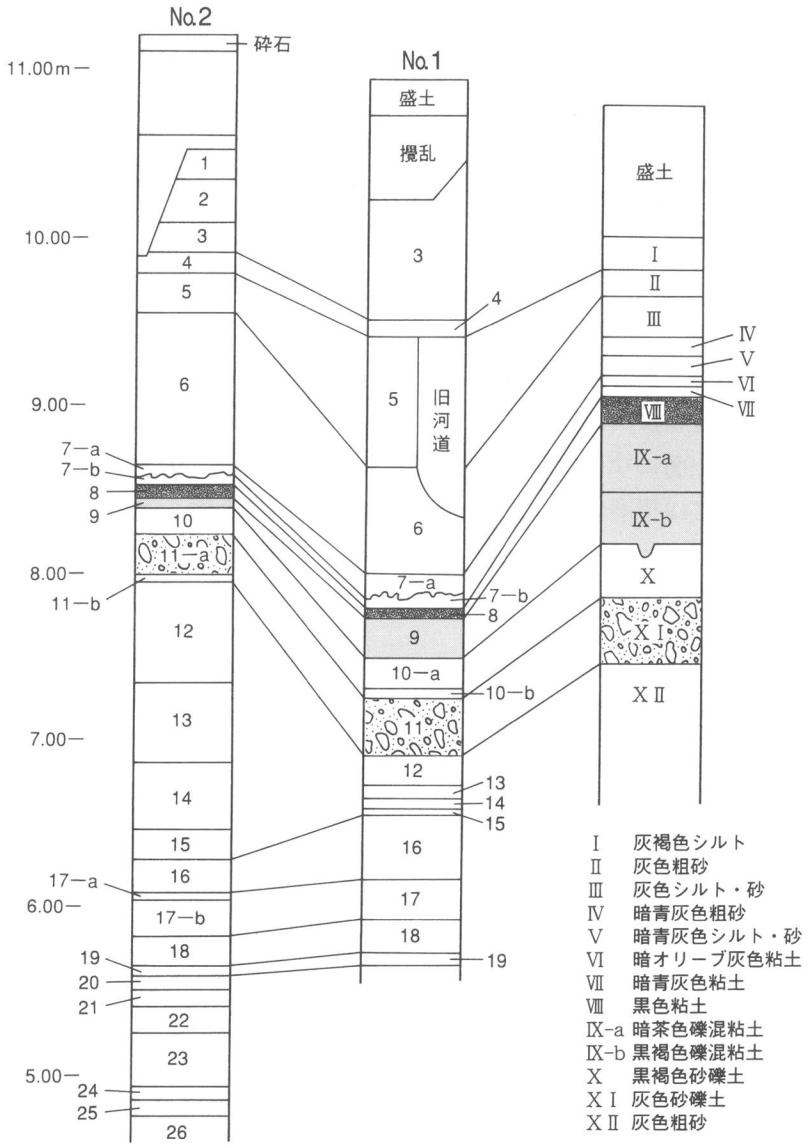
粘性は強く、しまりは強い。Ⅷ層の巻き上げが認められることから水田耕作土の可能性がある。

第Ⅷ層　黒色粘土

植物遺体が残存している。粘性・しまりややあり。層厚は10cm～15cmであり、受口状口縁台付甕が出土している。古墳時代前期の包含層と考えられる。

第Ⅸ-ａ層　暗茶色礫混粘土

植物遺体が残存し、焼土、炭化物が竪穴状遺構周辺で顕著に認められる。弥生時代後期後葉～古墳時代前期の遺物包含層であ



1 暗灰色砂質粘土
2 灰色砂混粘土
3 砂・シルト互層
4 灰褐色シルト
5 黒色粗砂
6 砂・シルト互層
7 灰色粘土
8 黒色泥炭
9 暗褐色土
10 暗褐色礫混じり粘土
11 砂礫土
12 灰色粗砂
13 砂・シルト互層
14 シルト・粘性シルト互層
15 褐色シルト～細砂
16 灰色シルト・灰色粘性シルト互層
17 灰色粘土
18 灰色粘性シルト
19 黒色泥炭
20 褐色粘土
21 黒色泥炭
22 褐色粘土
23 灰色粘土
24 暗褐色泥炭
25 灰色粘土
26 灰色砂

第６図　基本土層図

る。

第Ⅸ－ｂ層　黒褐色礫混粘土

上層よりやや暗く、炭化物が少量認められる。緑灰色細砂がブロック状に混入する。下位には砂質粘土が一部認められる。弥生時代後期後葉の包含層である。

第Ｘ層　黒褐色砂礫土

小礫を多量に含む。粘性は低く、しまりは強い。遺構はこの上面で検出している。層厚は25㎝～35㎝を測る。竪穴状遺構はＸ層まで掘り込まれる。

第Ⅺ層　灰色砂礫土

灰色粗砂を基に小礫が多量に含まれる。砂の部分は含水が多く、湧水が著しい。

本調査区の土層堆積状況は平成６年度に調査を行った小鹿杉本堀合坪遺跡の基本層序と比較検討したところ、鍵層と考えている第Ⅷ層、第Ⅸ層が、１次調査の８層の黒色泥炭層、９層の暗褐色土に相当することが判明した。また、特定は出来ないが、他にも７－ａ、７－ｂ層がⅥ、Ⅶ層に相当する可能性がある。ｂ層への巻き上げや炭酸鉄が認められていることから水田耕作土の可能性がある。今回の調査では、明確に確認されなかった。

今回の調査では、１層～３層に至る土層は造成による削平を受けており確認されなかった。遺構包含層及び遺構検出面は、第Ⅷ層が古墳時代前期の包含層、第Ⅸ層が弥生時代後期後葉の包含層、第Ｘ層が遺構検出面になる。第Ｘ層の黒褐色砂礫土は小鹿周辺で確認されており、竪穴状遺構が確認された地区においては標高が高く、安定した微高地を形成したことがうかがえる。

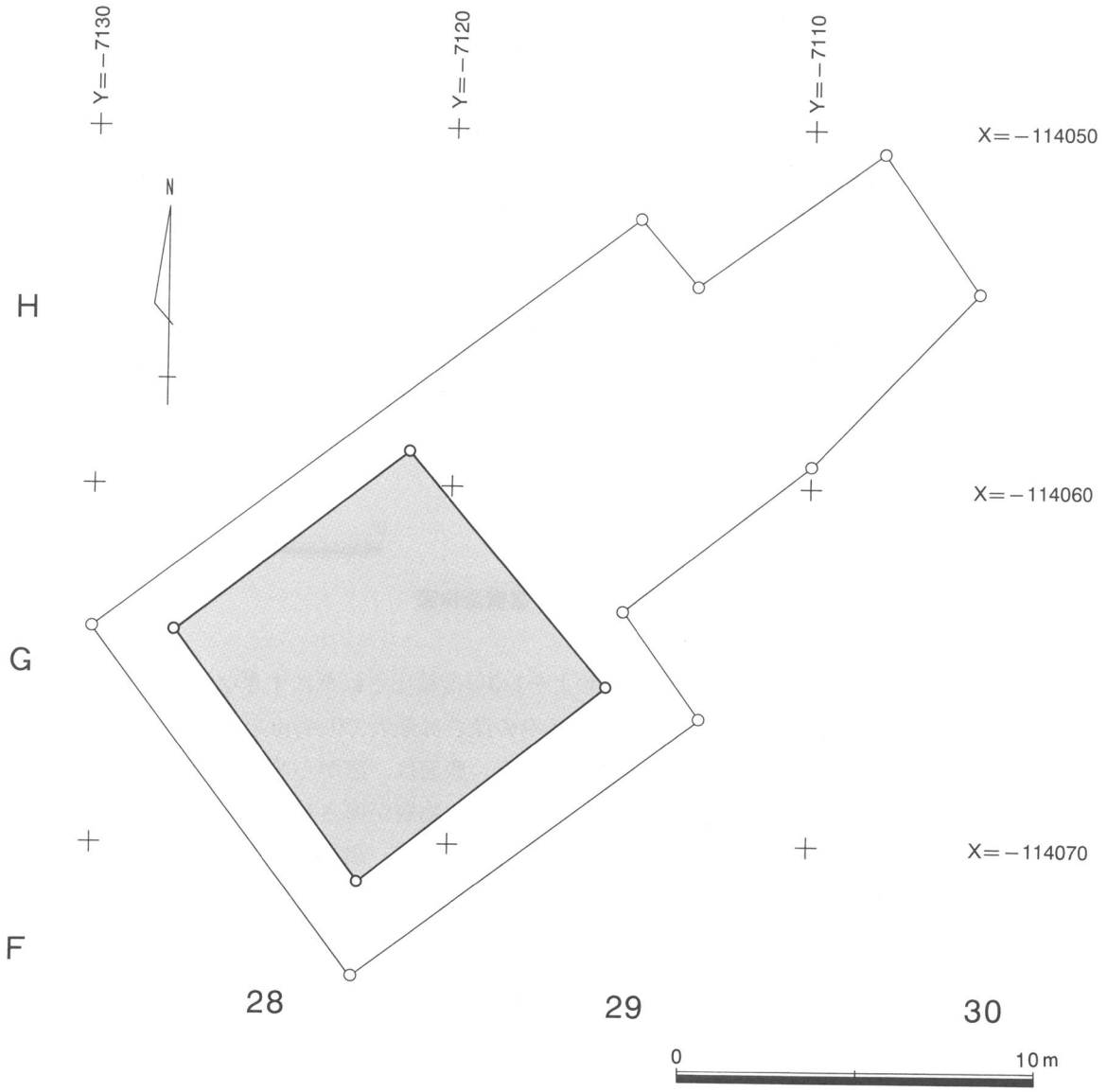
第Ⅲ章　遺構と遺物

第１節　検出遺構と出土遺物

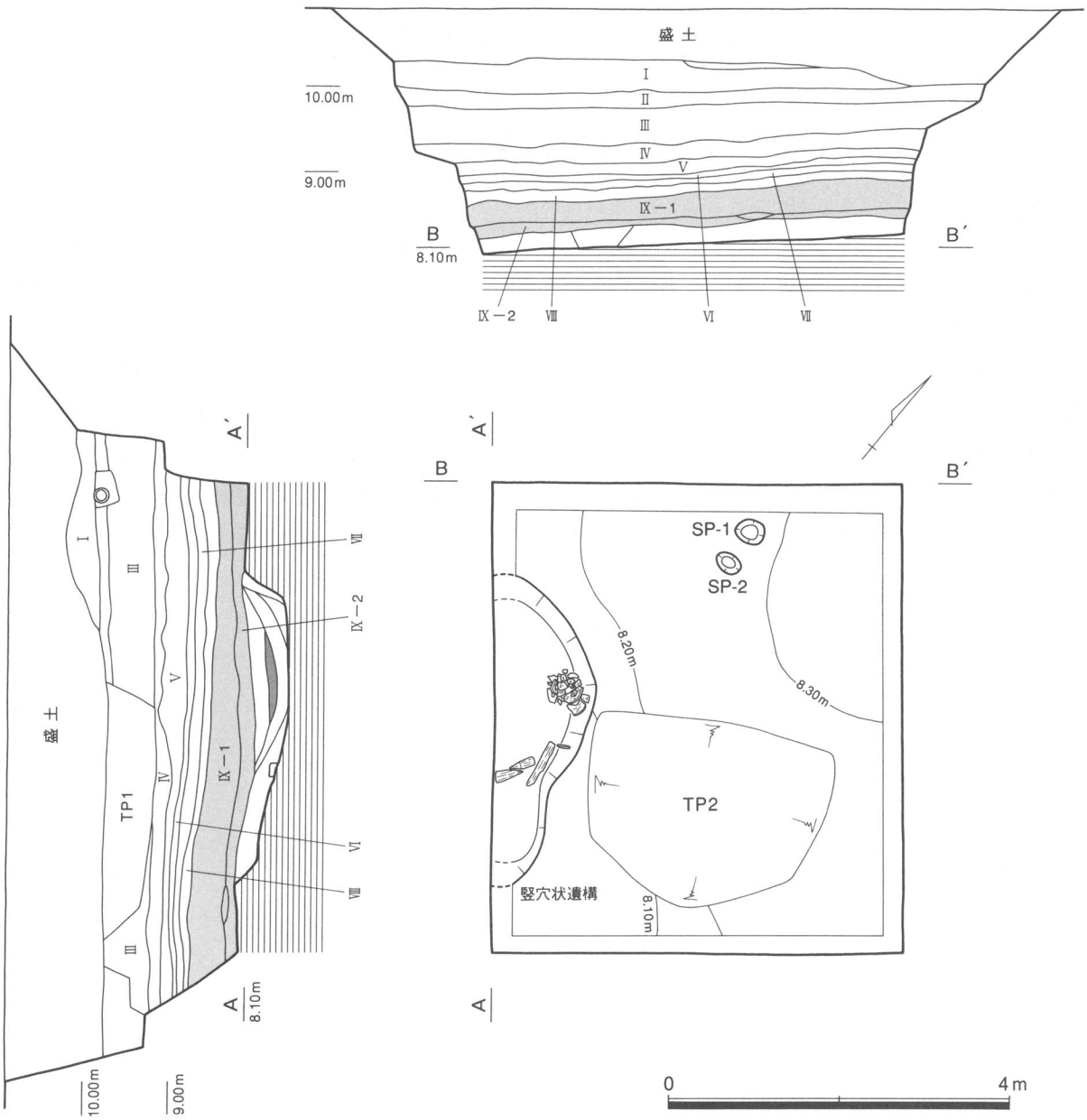
概　要

検出した遺構は竪穴状遺構１基、小穴２基である。検出面は第Ｘ層の黒褐色砂礫土上面で竪穴状遺構の埋土は上面に緑灰色粗砂が堆積しており、識別は容易である。遺物包含層は第Ⅷ層～第Ⅸ層で第Ⅷ層は古墳時代前期の包含層で、第Ⅸ層は弥生時代後期後葉の包含層である。

出土した遺物は土師器、弥生土器、石製品、木製品などである。出土遺物の大半を占めるのは、弥生土器で出土総量はテンバコにして５箱である。器種でみると台付甕、折り返し口縁壺が量的に多く、高坏、単純口縁壺等は少ない。弥生土器の大半は第Ⅸ層－ａの暗茶色礫混粘土層からの出土である。石製品は砥石、敲石、台石が出土している。遺物がまとまって出土したものは竪穴状遺構であり、木製品もすべてここから出土している。他にＳＰ１からも土器片の出土をみているが、図示し得るものはない。



第７図　調査範囲図



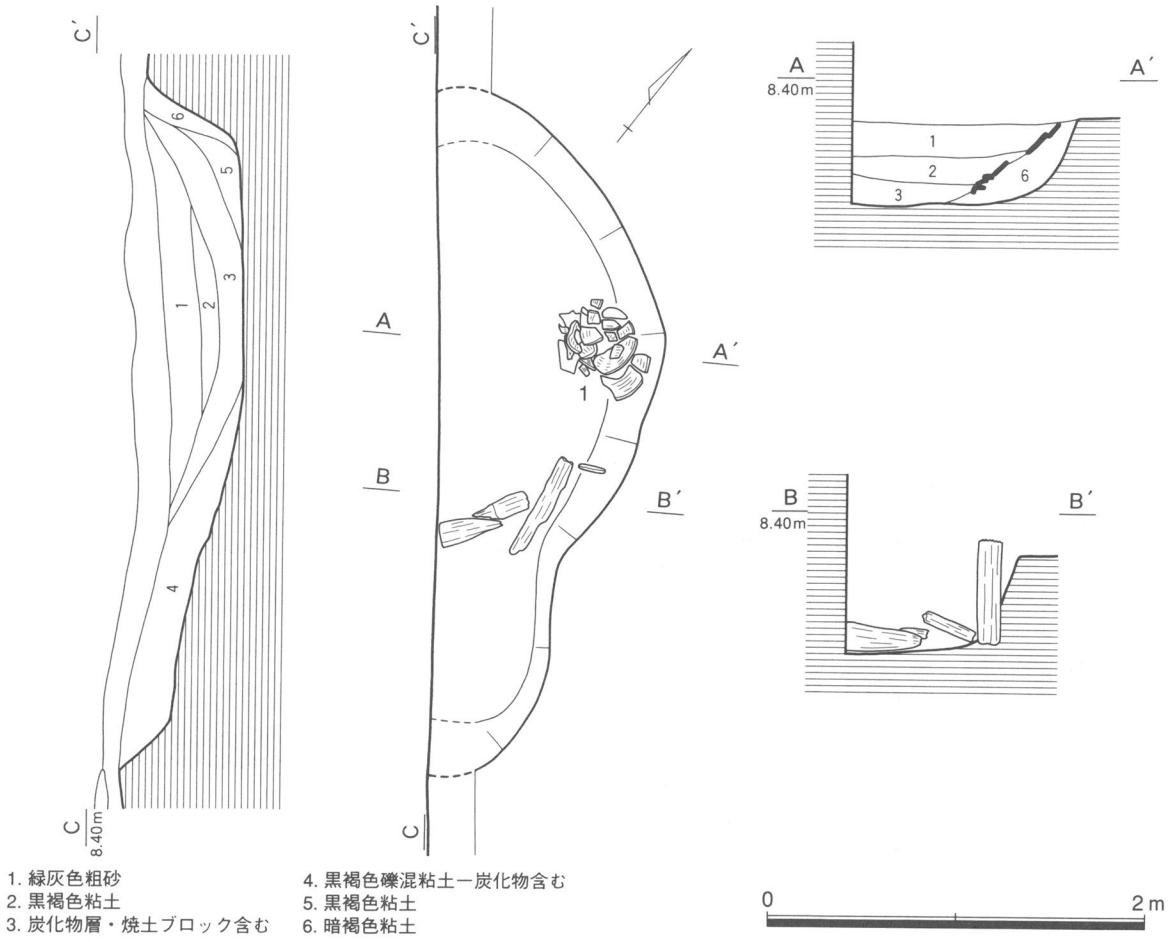
第８図　遺構全体図

１　竪穴状遺構（第８・９図　図版４）

竪穴状遺構は調査区西壁にかかっており、およそ1/3程度検出されたにすぎない。平面形は不整形な楕円形と推定される。検出長は3.6m、0.9m、掘込みの深さは最大で0.45mを測る。掘方外縁には板材が１点はめ込まれており、住居の羽目板とも考えられる。底面は、南から北にかけて低く傾斜している。覆土には、緑灰色粗砂が堆積し、下部にはレンズ状に炭化物層が厚さ10cmほど集積しており、竹笹類ではないかと考えられる。緑灰色粗砂から遺物は出土しておらず、黒褐色粘土層や炭化物層から、炭化した建築材、刳物容器、ヘラ状木製品、土器が出土している。所謂、焼失住居の可能性も考えられるが、柱穴、炉跡は確認されていないため、断定はできない。３層の炭化物層は４・５・６層が埋没した段階で堆積しているため、焼失した住居の部材を一括して廃棄した土坑の可能性が強い。いずれにしても近隣には集落域が想定される。

ＳＰ１・２（第８図　図版３）

小穴は調査区北東側で２基検出された。ともに楕円形を呈し、径0.36m～0.3m、深さ0.18m～0.15m



第９図　竪穴状遺構実測図

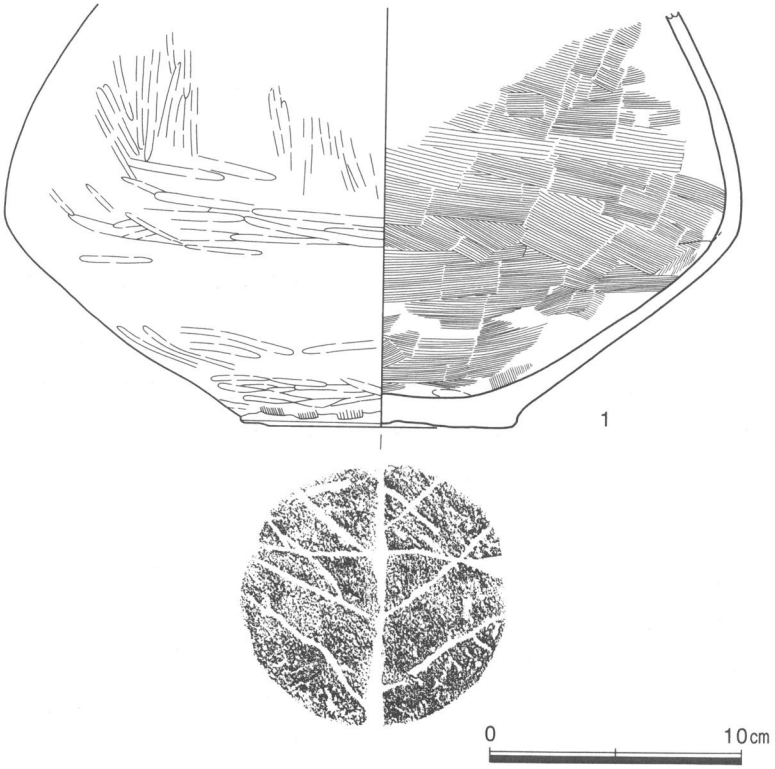
を測る。

覆土は黒褐色粘土で、青灰色砂のブロックを若干含む。ＳＰ１より土器片が数点出土している。

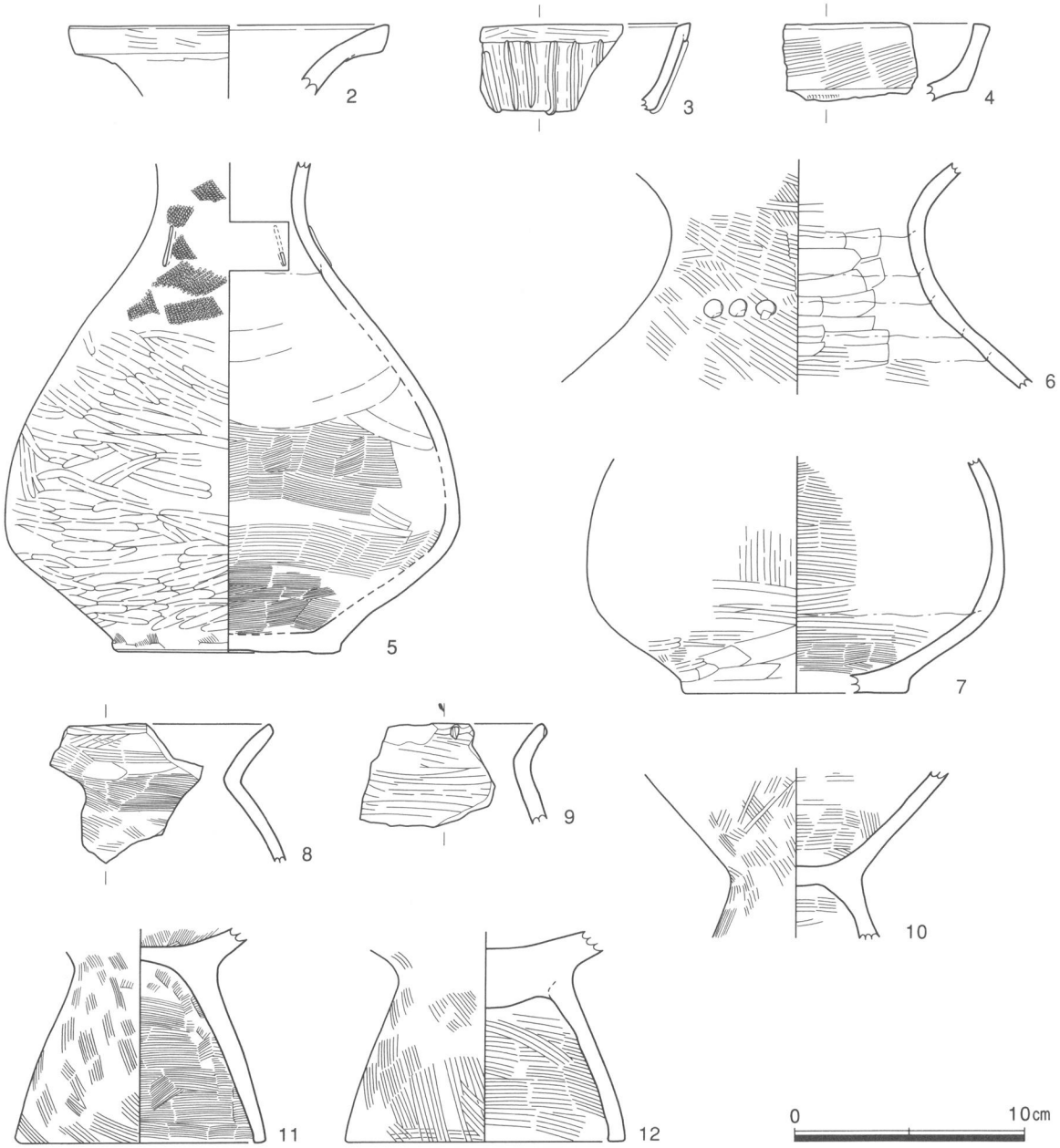
２　竪穴状遺構内出土土器

（第10・11図　図版５）

１は壺の底部から胴部片で竪穴状遺構内東側の６層上面から出土している。無花果形を呈し、底部には木葉痕が残存する。外面下位から屈曲部にかけて横方位のミガキ、上位にはタテミガキが施される。内面はヨコハケ調整が施される。弥生時代後期後葉に比定される。



第10図　竪穴状遺構出土土器実測図(1)



第11図　竪穴状遺構出土土器実測図(2)

２～７は壺の破片である。２は単純口縁壺の口縁部で、端部は面取り。３・４は複合口縁壺の口縁部である。３は複合部上位に、横位に粘土帯を貼り付け後に、６本の棒状浮文を付ける。端部は面取り。４は複合部を屈曲させ、外面に粘土帯を貼り付けている。５～７は壺の底部～頸部片である。５は無花果形を呈し、底部から胴上位にかけて横位のヘラミガキが施される。肩部は上段ＲＬ縄文下段はＬＲ縄文を施した後、棒状浮文を貼付する。弥生時代後期後葉に比定される。６は頸部～肩部にかけての破片で、外面はハケ調整を施し、３点１単位の円形浮文を貼付する。内面は、ハケ調整後ヨコナデ。７は胴下位に最大径を有し、にぶい稜をもつ。外面下位はヨコヘラミガキ調整、中位にはタテヘラミガキ調整を施す。内面はヨコハケ調整。８～12は「く」の字状口縁台付甕である。８は刻目が入らない。９は屈曲がやや弱く、端部に刻目が入る。10～12は脚部片で、11の外面は斜位のハケ調整後にナデ調整、内面はヨコハケ調整が施される。底部にススが付着している。12は直線的に大きく開く。天井部はナデ調整。

3　竪穴状遺構内出土木製品（第12図１～10　図版12）

１～７は建築材の可能性のある木製品である。材のすべては、ほぼ全面にわたり炭化している。加工が残るものは、わずかに１・２の方形孔のある板目材であるが、これも炭化欠損が著しく、器種用途は特定できない。

４も表裏両面にＶ字に切り込まれた加工がある。３・５～７は角柱状に加工された製品ではなく、作りが粗雑である。この他にも炭化した木材が何点か出土しているが、いずれも建築材の可能性がある。

８は用途不明木製品。芯持ち材で作られた完形品である。上端部をやや細く削りだしてあるものの、断面形は不定形で丁寧なつくりではない。図示した木製品の中では、唯一の広葉樹材である。

９は刳物容器の底部分である。木取りは横木取り柾目。口縁部と胴部が欠損しているため、容器の形状は不明である。底径は6.4×5.4cmの丸底で、ほぼ平滑面である。内椀面と外椀面から底部にかけて黒い顔料と思われる痕跡が残っている。

10はヘラ状木製品である。非常に丁寧に作られた完形品であるが、器種・用途は杓子などの食事具とは断定できない。下端部縁辺は、かなり使い込まれたようで、著しくすり減っている。ヒノキの板目材。細い軸部から下は斜めに肩が削り出され、下方へ向かってやや幅が狭くなる形状である。表面は樹皮のような付着物が残っていることから、材の表皮面の端材から作られた製品とも考えられる。一方、裏面は平坦な面が作られ、刃物による細かい加工痕が残る。

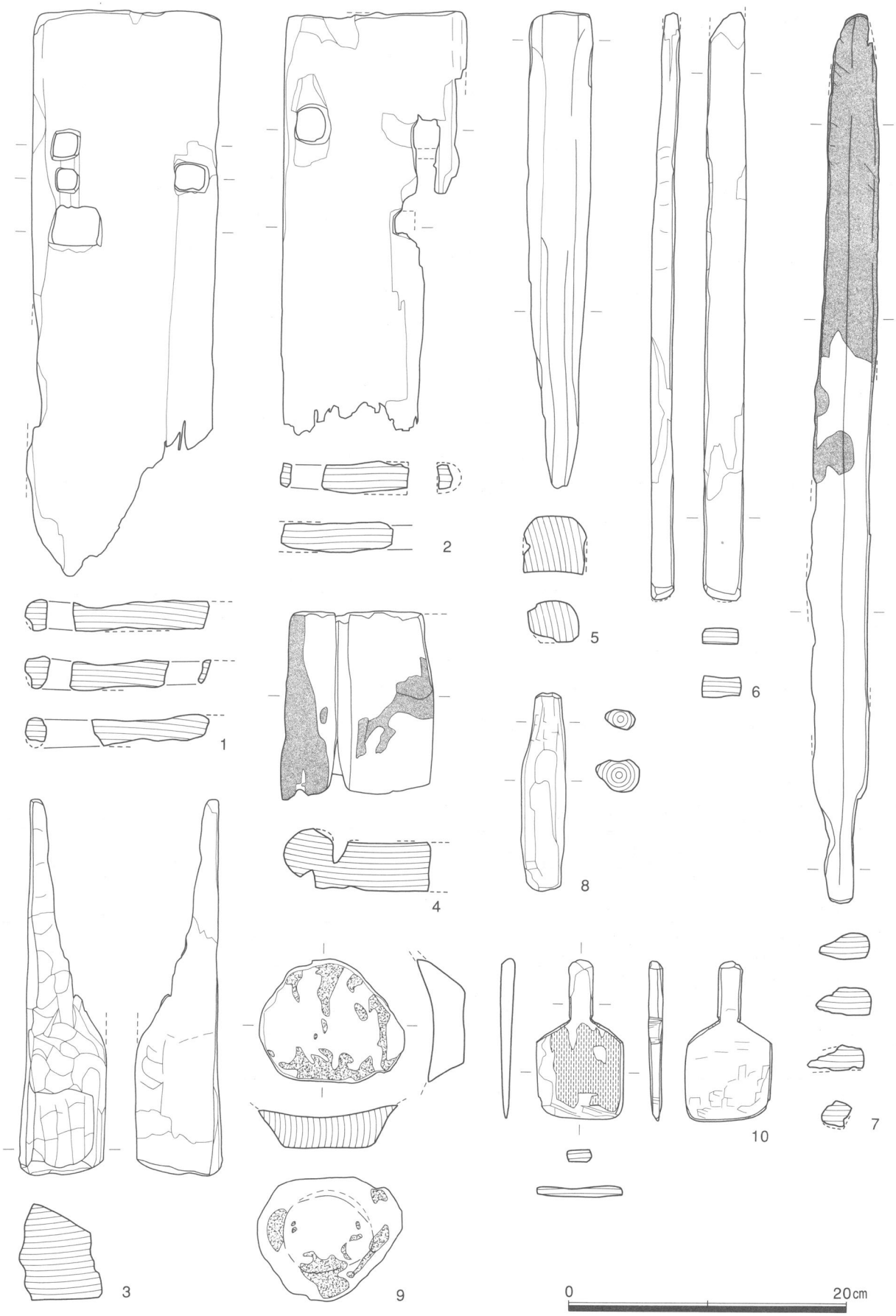
本遺跡の木製品は全て竪穴状遺構から出土したもので、炭化物層以下の層位から出土している。炭化した木製品が多いのは、不要になった木材の焼却処分か、もしくは火災等で焼失した住居の部材が投棄されたものと考えられる。また、９・10のような生活用具が出土している点からも、本遺跡が集落に近接した場所か、もしくは集落内の生活域である可能性が高い。

製品に使われた樹種は圧倒的に針葉樹が多く、スギ材を使用している。この傾向は、静清平野の他の弥生時代～古墳時代前期の集落遺跡、水田遺跡から出土した木製品と同様である。

表３　出土木製品計測表

番号	大項目	中項目	遺構・層位	木取り	樹種	長さ（cm）	幅（cm）	厚さ（cm）	備考
1	建築材		竪穴状遺構	板目	スギ	[40.6]	13.4	2.4	炭化
2	建築材		竪穴状遺構	板目	スギ	[30.3]	13	2.3	炭化
3	建築材		竪穴状遺構	板目	ヒノキ	[27.0]	6.1	6.8	
4	建築材		竪穴状遺構	板目	スギ	13.5	[10.9]	4.4	
5	用途不明木製品	棒状木製品	竪穴状遺構	柾目	スギ	34.1	4.5	4.2	炭化
6	用途不明木製品	棒状木製品	竪穴状遺構	板目	スギ	42.2	1.5	2.8	
7	用途不明木製品	棒状木製品	竪穴状遺構	板目	スギ	64	4.9	2	
8	用途不明木製品	棒状木製品	竪穴状遺構	芯持材	スダジイ	[14.3]	3.1	2.3	
9	容器	刳物	竪穴状遺構	横木取り柾目	スギ	底径6.4×5.4	高さ3.5		
10	食事具	ヘラ	竪穴状遺構	板目	ヒノキ	11.5 柄　長さ4.3幅1.8厚さ1.0	身　長さ7.5　幅6.2		

※樹種同定は当研究所保存処理室長西尾太加二が行った。



第12図　竪穴状遺構出土木製品実測図

第２節　包含層出土遺物

１　土器

小鹿杉本堀合坪遺跡では、弥生時代後期～古墳時代前期の土器がテンバコにして５箱分出土している。検出された遺構は、竪穴状遺構１基、小穴２基のみであり、調査面積が狭いにもかかわらず、多量の土器が出土したといえる。土器については全体的に良好な状態であり、あまり摩耗はすすんでいない。土器の出土量や竪穴状遺構から建築材と思われる木製品が出土していることから、周辺には集落が存在したと考えられる。器種には壺、甕、高坏、鉢などがあり、大半が弥生時代後期後葉～古墳時代前期の土器に比定される。壺が圧倒的に多く、ついで甕が多く出土している。その他の高坏や鉢類は少ない。今回出土した古墳時代前期の土師器と弥生時代後期後葉の土器群との識別は出土層位もほぼ同一であることから明確に区分できないためここでは一括して取り上げる。

壺

単純口縁壺（第13図13～16　図版７）

13～16は単純口縁壺の口縁部である。13はやや外方に開き、外面にハケ調整。14は直線的に開き、端部でやや外方に屈曲する。外面はヨコナデ調整。15はやや外反しながら、外方へ開く。端部は面取りされる。外面はタテハケ調整、内面はヨコハケ調整。16は緩やかに外方に開き、端部は面取りされる。

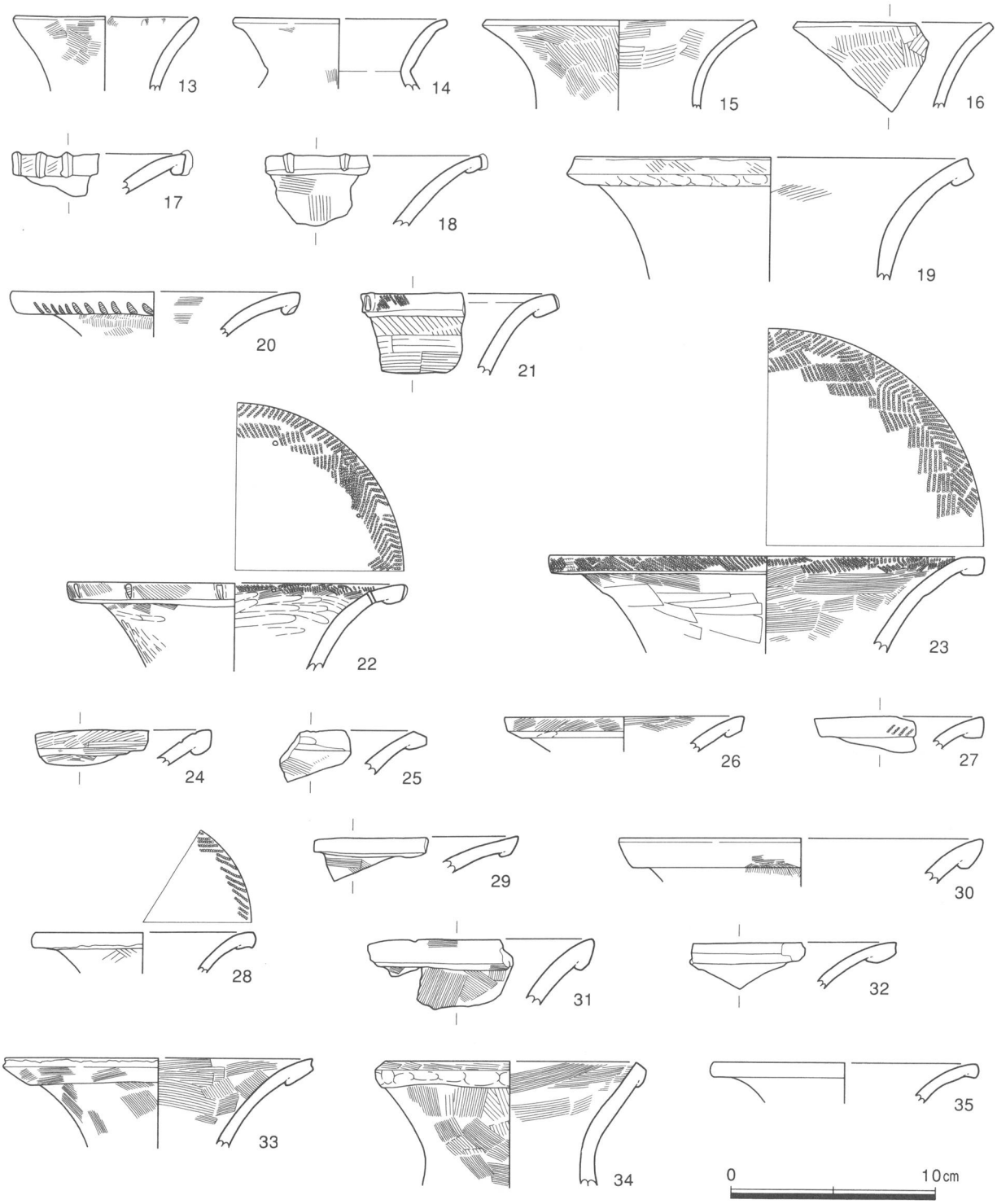
折返し口縁壺（第13図17～35　図版５・７）

17～35は折返し口縁壺の口縁部である。17は外方に外反し、折返し面に棒状浮文が３個つく。折返面にはハケ調整が施される。断面は方形を呈する。18は外方に外反し、端部に棒状浮文がつく。外面はハケ調整、内面はヨコハケ調整。17・18は弥生時代後期末に比定される。19は大きく外反し、断面は方形を呈する。端部は面取りされる。胎土から静岡県東部の東駿河地域からの搬入品と思われる。弥生時代後期末に比定される。20は外方に外反し、折返し面には斜位に刻みが施される。外面はタテハケ調整、内面はヨコハケ調整。断面は方形を呈する。静岡県西部の東遠江地域からの搬入品と考えられる。21は外方に外反し、折返し面にＲＬ縄文を施す。外面は、ヨコハケ調整後にＬＲ縄文を施す。断面は方形を呈する。22は口縁部外面にタテヘラミガキ調整、内面はヨコヘラミガキ調整が施される。折返し面には棒状浮文がつく。折返し面下部には穿孔が施される。内面は羽状縄文が施される。23は外方に開き、折返し面の断面はやや厚い方形を呈する。折返し面はハケ調整後、ＲＬ縄文を施す。内面は羽状縄文を施す。口縁部外面はヨコナデ調整、内面はヨコハケ調整。22・23は古墳時代前期に比定される。

24は外方に外反し、断面は方形を呈する。折返し面にはハケ調整。内面は表面が摩耗しているため不明。26は低い折返し面がつき、内外面ともにハケ調整。27は大きく外反し、折返し面にＬＲ縄文を施す。断面は方形を呈する。28は外方に外反し、折返し面の断面は、低い方形を呈する。端部は面取り。内面にＲＬ縄文が施される。29は外方に外反し、低い折返し面がつき、やや丸みを帯びる。端部は面取りされる。30は外方に外反し、やや丸みを帯びた低い折返し面が付く。31は外方に外反し、折返し面の断面はやや丸みを帯びる。外面はハケ調整。32は外方に外反し、断面はやや丸みを帯びる。33は低い折返し面がつく。内外面はハケ調整。34は口縁部が直線的に延び、低い折返し面がつく。外面はタテハケ調整、内面はヨコハケ調整が施される。端部は面取り。35は折返し面の幅は狭く、低い。表面摩耗のため調整不明。

複合口縁壺（第14図36～47　図版7）

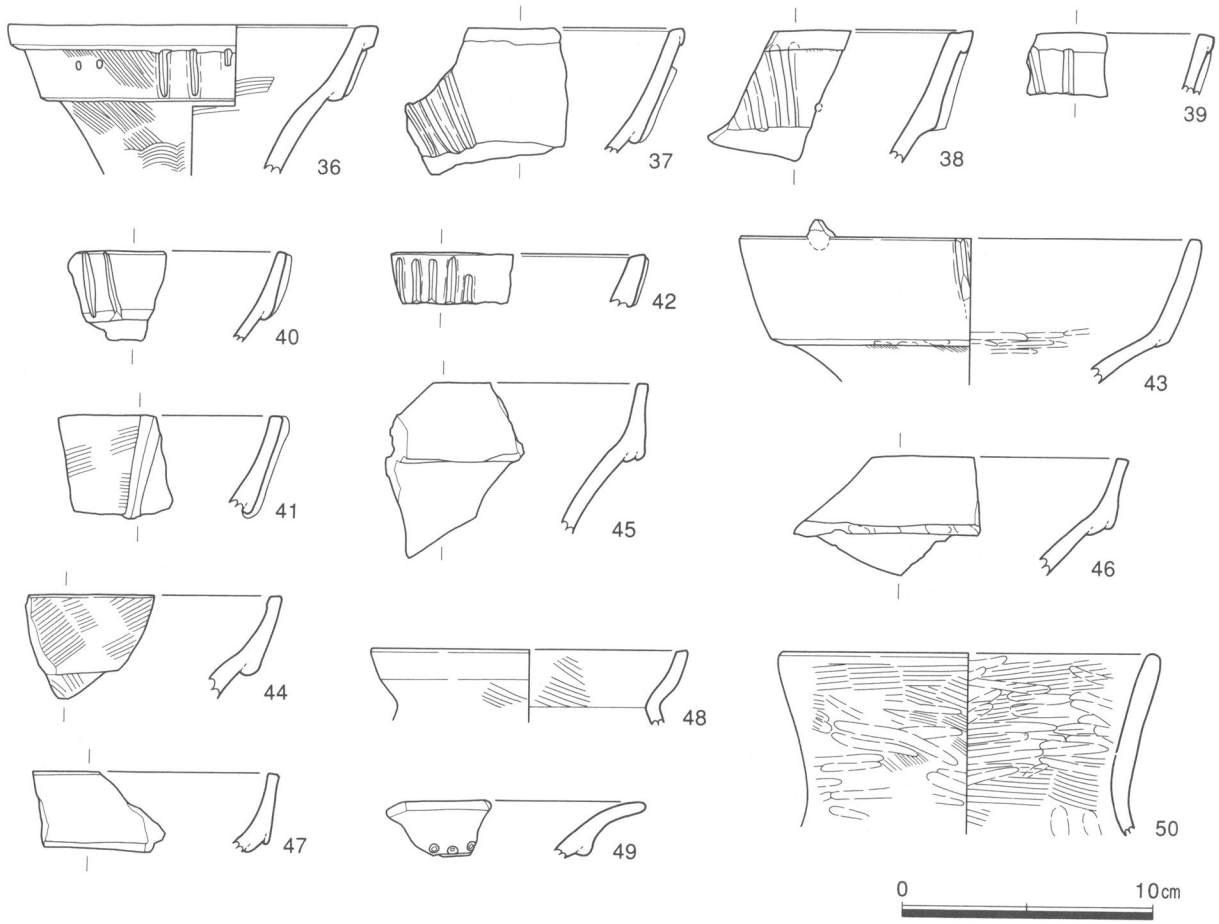
36～47は複合口縁壺の口縁部片で、36～43は複合部に棒状浮文がつくものである。36～39は、複合部上位に横位に粘土帯をつけるものである。36は複合部上位にやや厚い粘土帯がつき、３本１単位の棒状浮文がつく。複合部上位には２個１単位の穿孔が施される。口縁部外面はハケ調整後、櫛描波状文が巡



第13図　包含層出土土器実測図(1)

る。内面はハケ調整。弥生時代後期末に比定される。37はやや広い幅をもつ複合部に４本１単位の棒状浮文がつく。38は４本の棒状浮文がつき、複合部下位に穿孔が認められる。39は２本の棒状浮文が認められる。40は２本の棒状浮文がつく。41は複合部にハケ調整後、棒状浮文が１本認められる。42は５本の棒状浮文がつく。43は棒状浮文が付き、端部に突起がつく。37～43は古墳時代前期に比定される。

44～47は棒状浮文がつかないもので、古墳時代前期に比定される。44は複合部に斜位のハケ調整が施される。45～47は口縁部が外反し、複合部は屈曲させ、外面は粘土帯を貼り付けている。端部は面取り



第14図　包含層出土土器実測図(2)

される。48はやや外反した口縁部をもつ。内外面にハケ調整が施される。

二重口縁壺（第14図49　図版７）

49は小型の二重口縁壺の口縁部片で、竹管状工具による円形刺突文が施される。古墳時代前期に比定される。

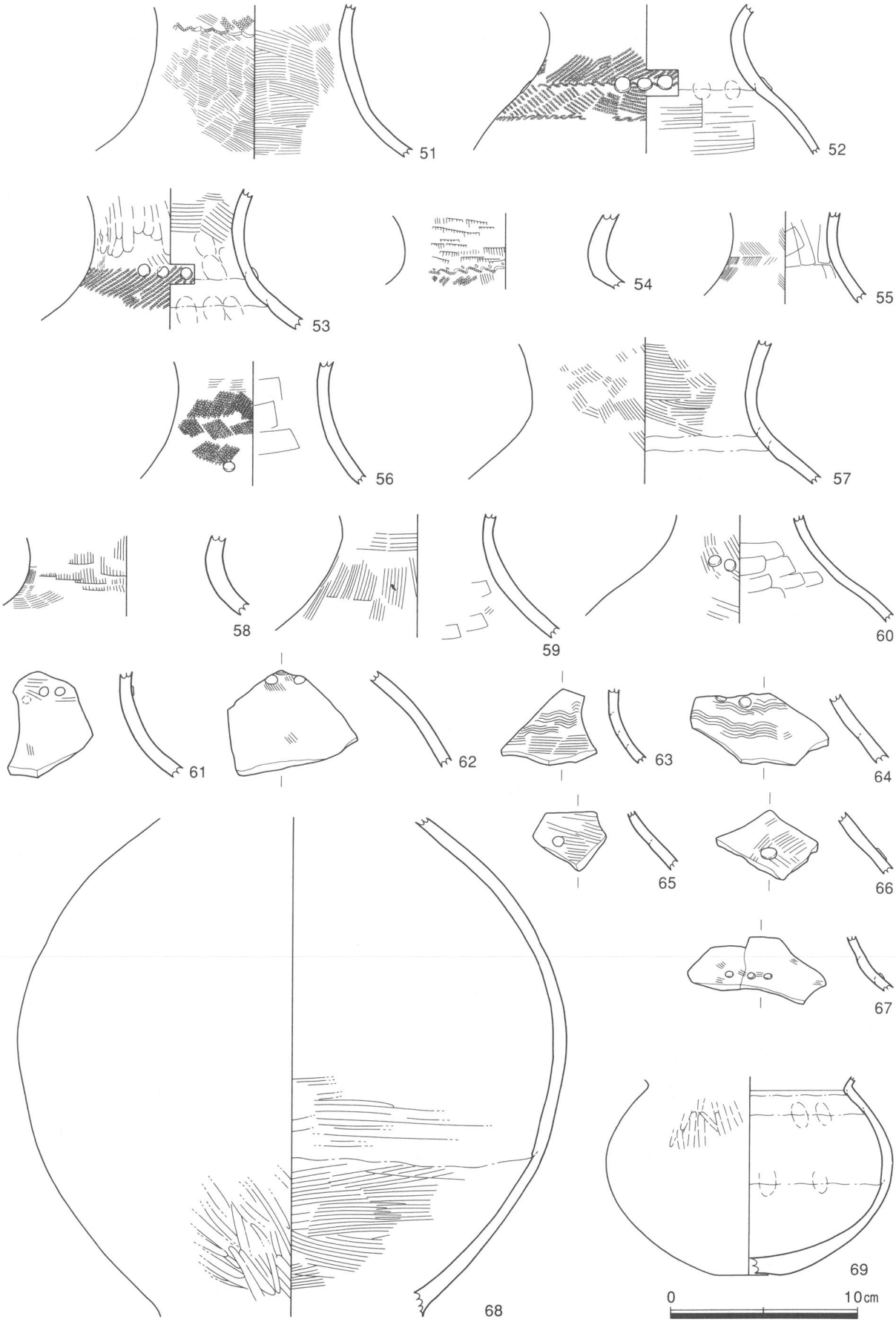
直口壺（第14図50　図版７）

50は直立ぎみに立ち上がり、外面はハケ調整後にヨコヘラミガキ調整、内面はヨコハケ調整後にヨコヘラミガキ調整を施す。古墳時代前期に比定される。

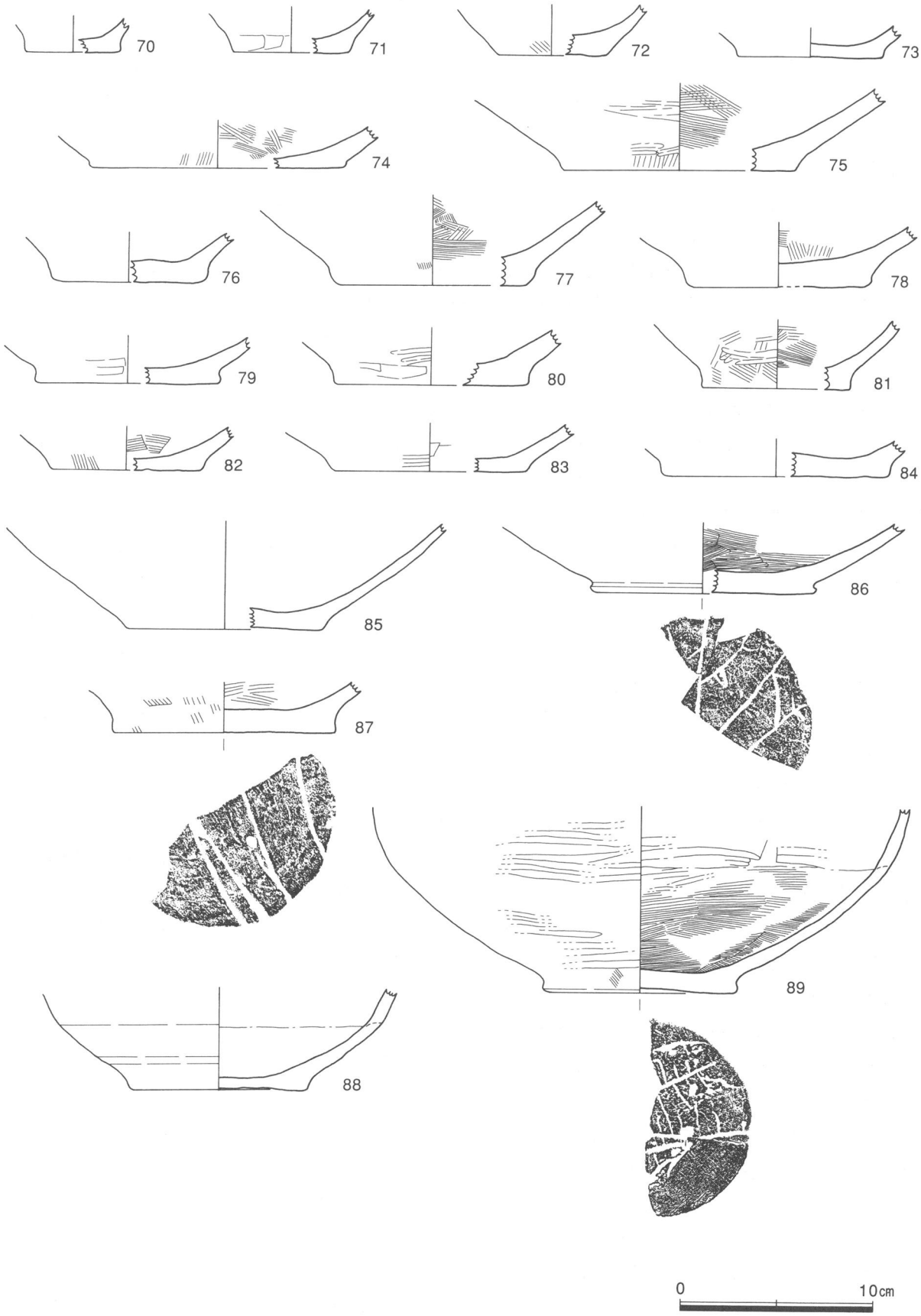
壺頸部片（第15図51～69　図版５・８）

51～69は壺の頸部から胴部の破片である。縄文を施すものとハケ調整を施すものに大別される。51～54・56は縄文を施すものである。51は、頸部外面にＳ字状の結節文を伴うＲＬ縄文が施される。内面はヨコハケ調整。52は肩部がやや張り、口縁部は外反する。外面肩部にはＳ字状結節文を伴う上段ＬＲ下段ＲＬ縄文を施し、３個１単位の円形浮文がつく。53は肩部にＬＲ縄文を施し、３個１単位の円形浮文が３箇所につく。頸部外面はタテのヘラミガキ調整、内面は指頭痕が残る。54は肩部にＳ字結節文を伴うＬＲ縄文が施される。

55・57～60はハケ調整を施すものである。55は細い頸部に外面はハケ調整、内面は板ナデ調整。56は外面に細かい羽状縄文、内面に板ナデ調整を施す。円形浮文が１個つく。57は外面にハケ調整後にナデ調整、内面はヨコハケ調整。58は外面にタテハケ調整、内面は板ナデ調整。59は外面にハケ調整を施す。60は肩部は丸く張り、細い頸部につながる。外面はハケ調整後にナデ調整、内面は板ナデ調整。



第15図　包含層出土土器実測図(3)



第16図　包含層出土土器実測図(4)

59～67には円形浮文が貼付されるものである。63・64は櫛描き波状文が横位に巡る。64は円形浮文が２点つく。65・66には円形浮文が１点つく。67は３個１単位の円形浮文がつく。68は胴中位に最大径を測る。外面は胴部下位にタテのヘラミガキ調整、内面にはヨコハケ調整が施される。古墳時代前期に比定される。69は球胴状の胴部を持ち、胴中位に最大径を測る。底部はやや上げ底である。外面はタテのヘラミガキ調整、内面は指頭圧痕が残る。古墳時代前期に比定される。

壺底部片（第16図70～89　図版９）

70～89は壺の底部片である。70～72は小型の壺の底部片と思われる。73・74は底部の厚さが薄い。76～80は底部の厚さが厚い。80は外面にヨコヘラミガキ調整、内面はヨコハケが施される。82・83は底部の厚さが薄い。86・87・89は底部に木葉痕がみられる。86は底部が外にやや張り出すもので、胴はかなり開く。88は胴下位に最大径を測り、やや緩やかな稜をもつ。89は屈曲は弱いが、胴下位に最大径を測る。外面はヨコヘラミガキ調整、内面下位はヨコハケ調整、中位にはヨコナデ。

甕

「く」の字状口縁台付甕（第17図90～116　図版５・10・11）

90～116はくの字状口縁甕の口縁部片で、90～104は端部に刻みがはいるものである。90～92は端部全体に刻みをいれるものである。93～104は、面取りした端部下端に、刻みを入れるものである。103は口縁部に低い粘土帯を付け、端部に刻みを入れる。

105～115は、刻みを持たない甕の口縁部である。105は頸部が緩やかな稜をもち、端部は面取りされる。外面はヨコハケ調整、内面はヨコハケ調整。口径は20.4cmを測る。106は胴部中位に最大径をもち、頸部は稜をもちながら屈曲する。端部は丸く仕上げる。外面は板ナデ調整。口径24.5cm胴部最大径27.5cmを測る。107は頸部が稜を持ち、屈曲する。外面はハケ調整、内面はヨコハケ調整。端部はやや丸く仕上げる。108はくの字に屈曲し、口縁部外面はナナメハケ調整で内面はヨコハケ調整。109は稜を持たず屈曲し、口縁部はヨコナデ調整。110は頸部は稜を持たずに屈曲し、口縁部が大きく外傾する。端部は面取りされる。

111～115は屈曲が弱く、緩く外反するものである。111は外面がハケ調整後にナデ調整。内面はハケ調整である。112は外面にハケ調整後にナデ調整。内面板ナデ調整。端部は面取りされる。内面は板ナデ調整。113は口縁端部は面取りされ、内外面ハケ調整。114は口縁部が短く外反し、端部は面取りされる。外面はハケ調整後にナデ調整。内面はハケ調整。115は口縁部が短くやや外反し、外面はナナメハケ調整を施す。内面は板ナデ調整。116はやや直立ぎみに立ち上がり頸部にタテハケ調整が施される。内面はハケ調整後にナデ調整。

丸底甕（第17図117　図版６）

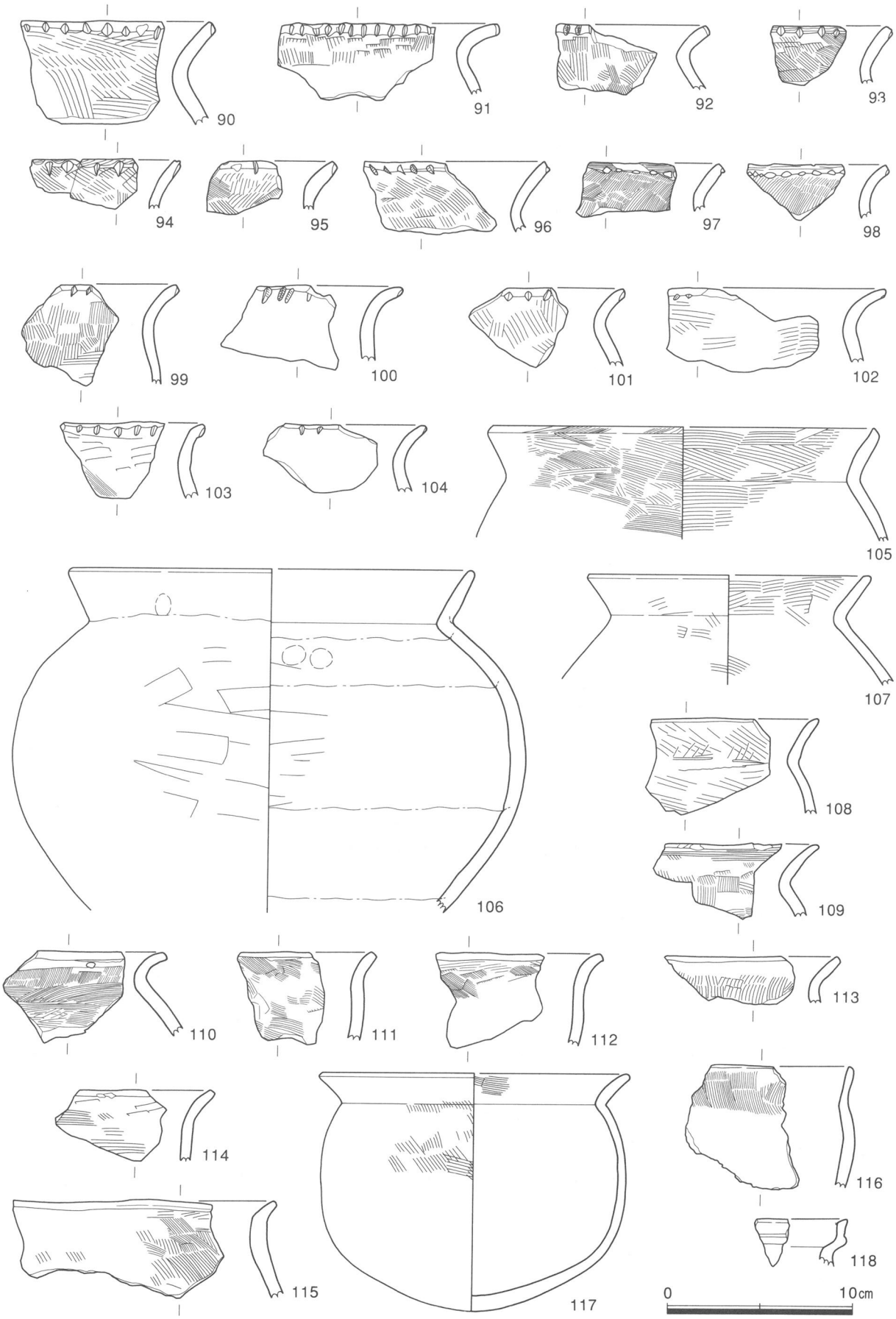
117は丸底の甕で無花果形を呈し、口縁部は稜をもちながら屈曲する。端部は面取りされる。外面はハケ調整、内面は摩耗のため詳細は不明である。古墳時代前期に比定される。

受口状口縁甕（第17図118　図版10）

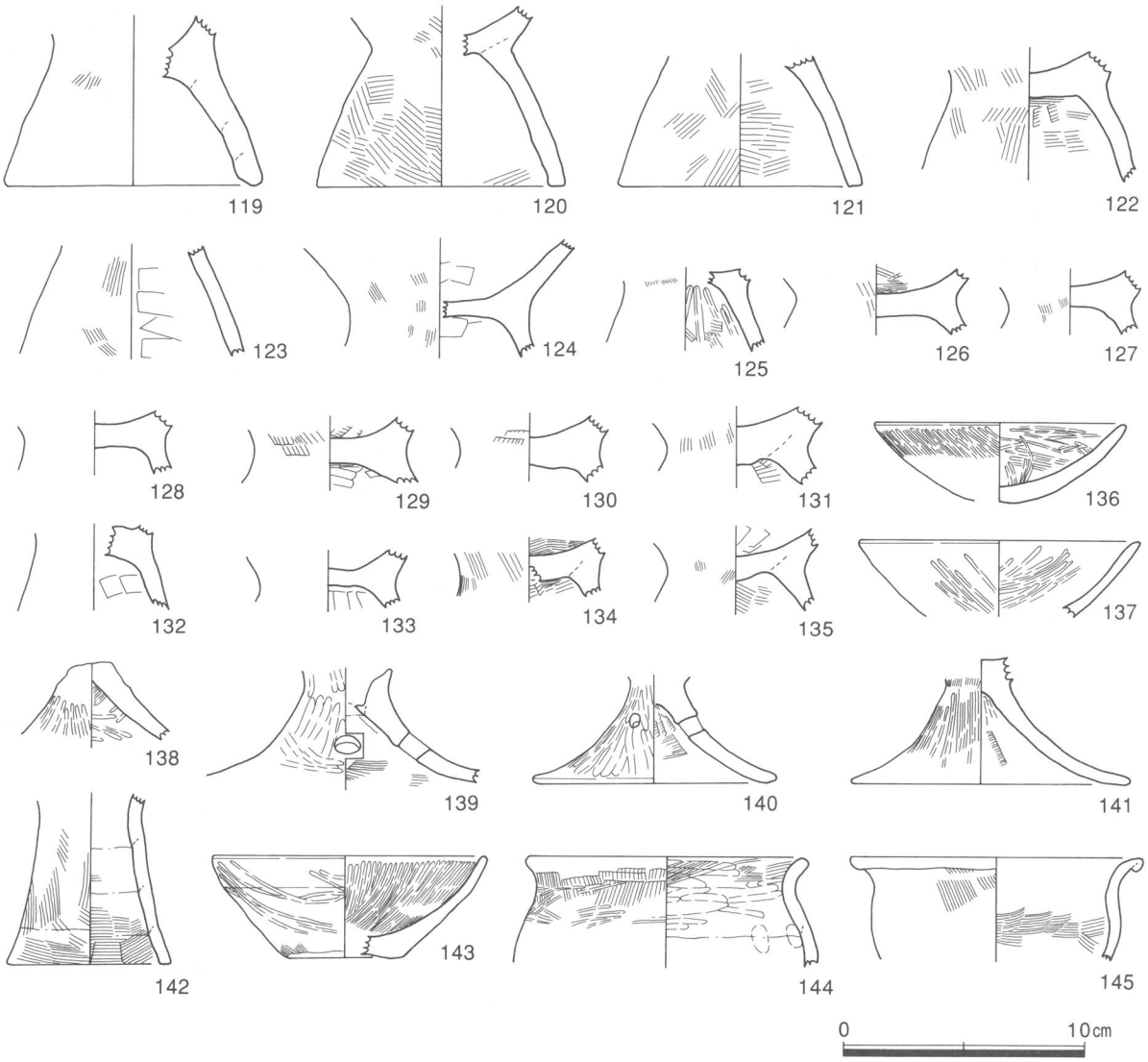
118は受口状口縁甕の口縁部である。１点のみの出土で、古墳時代前期に比定される。

甕の脚部片（第18図119～135　図版11）

119～135は台付甕の脚部片である。119は厚手で、やや内湾気味である。外面はハケ調整後にナデ調整。120の脚部は、内湾気味である。外面はハケ調整、接合部はハケ調整後にナデ調整を施す。内面はナデ調整。端部は面取りされる。121は直線的に広がり、外面はハケ調整後にナデ調整。内面はハケ調整。端部は面取りされる。122は外面がハケ調整のちにナデ調整、内面は板ナデ調整が施される。内面は下位にヨコハケ調整。124～135は脚部の接合部片である。



第17図　包含層出土土器実測図(5)



第18図　包含層出土土器実測図(6)

高坏（第18図136～142　図版6・11）

136・137は高坏で、古墳時代前期に比定される。136は高坏の坏部で碗状を呈し、端部は丸く仕上げる。外面は斜位のヘラミガキ調整、内面はヨコヘラミガキ調整が施される。137は直線的に立ち上がり内外面にヘラミガキ調整が施される。138～142は開脚高坏の脚部である。138は外面にタテヘラミガキ調整で内面はヨコヘラミガキ調整が施される。139は外方に低く開く脚部で、透かし孔を４方に穿孔する。外面はヘラミガキ調整、内面はハケ調整を施す。140は外方へ低く開く脚部で、透かし孔は３方に穿孔する。外面はタテヘラミガキ調整、内面は板ナデ調整を施す。141は外方に低く開く脚部で、外面はタテヘラミガキ調整、内面は板ナデ調整が施される。142は端部がやや外反し、薄手である。脚部下位にはヨコハケ調整、中位はハケ調整のちにナデ調整を施す。弥生後期後葉に比定され、在地の高坏と考えられる。

鉢（第18図143～145　図版６・11）

143はやや上げ底で、口縁部は直線的に開く小型の鉢である。外面はハケ調整後にヘラミガキ調整、内面は放射状にヘラミガキ調整が施される。口径11.1cm、器高4.2cmを測る。出土層位から古墳時代前期に比定される。

144・145は球胴状の胴部を呈する鉢あるいは短頸壺である。内外面ともにハケ調整を施す。144はやや

緩やかに外反する口縁部に球胴状の胴部をもつもので、外面は頸部にタテハケ調整。145は球胴状の胴部に口縁部はやや外反する。折返し部はやや丸く仕上げる。外面はタテハケ調整、内面は胴部中位にハケ調整が施される。古墳時代前期に比定される。

表４　出土土器観察表(1)

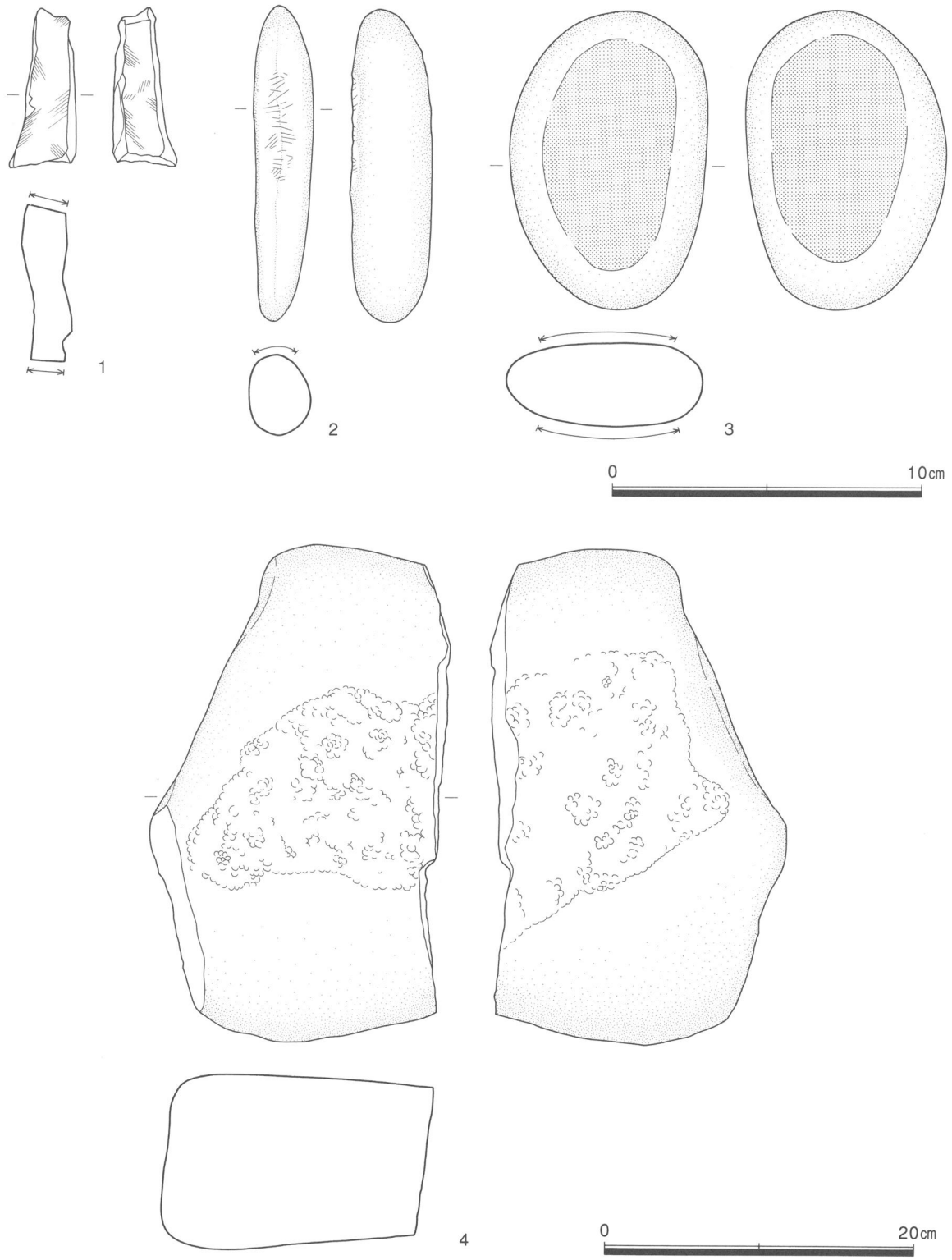
番号	位置・遺構	層　位	器　種	部　位	法　量	胎　土	色　調	備　考
1	竪穴状遺構	6層上面	壺	底部～胴部	底径10.2　胴部最大径（28.8）	白色粒子　石英	10Ｙ R7/4にぶい黄橙色	弥生後期後葉
2	竪穴状遺構	覆土	壺	口縁部	口径（10.2）	白色粒子　小礫	10Ｙ R6/3にぶい黄橙色	弥生後期後葉
3	竪穴状遺構	覆土	壺	口縁部		小礫　白色粒子	10Ｙ R6/2灰黄褐色	古墳前期
4	竪穴状遺構	覆土	壺	口縁部		白色粒子	7.5Ｙ R6/3にぶい褐色	古墳前期
5	竪穴状遺構	覆土	壺	底部～頸部	底径9.25　胴部最大径19.6	小礫　白色粒子	10Ｙ R7/3にぶい黄橙色	弥生後期後葉
6	竪穴状遺構	覆土	壺	頸部		白色粒子　石英	10Ｙ R6/2灰黄褐色	弥生後期後葉
7	竪穴状遺構	3層	壺	底部	底径（9.6）	白色粒子	10Ｙ R6/1褐灰色	古墳前期
8	竪穴状遺構	6層上面	甕	口縁部		小礫	2.5Ｙ灰白色	弥生後期後葉
9	竪穴状遺構	覆土	甕	口縁部		白色粒子	10Ｙ R7/2にぶい黄橙色	弥生後期後葉
10	竪穴状遺構	覆土	甕	脚部		小礫　白色粒子	10Ｙ R6/1褐灰色	弥生後期後葉
11	竪穴状遺構	2層	甕	脚部	裾部径10.4	小礫　白色粒子	5Ｙ7/1灰白色	弥生後期後葉
12	竪穴状遺構	5層	甕	脚部	裾部径（12.0）	石英　小礫	10Ｙ R6/2灰黄褐色	弥生後期後葉
13	排水溝西	Ⅸ-a	壺	口縁部	口径（8.7）	小礫　白色粒子	10Ｙ R7/2にぶい黄橙色	古墳前期
14	西壁	Ⅸ-a	壺	口縁部		小礫　白色粒子	7.5Ｙ R7/3にぶい橙色	古墳前期
15	排水溝西	Ⅸ-a	壺	口縁部	口径（12.9）	小礫　白色粒子	2.5Ｙ6/2灰黄色	古墳前期
16	北	Ⅸ-b	壺	口縁部		小礫　白色粒子	7.5Ｙ R6/3にぶい褐色	古墳前期
17	ＴＰ2	Ⅸ-b	壺	口縁部		小礫	10Ｙ R6/2灰黄褐色	弥生後期後葉
18	集水桝	Ⅸ-b	壺	口縁部		小礫　白色粒子	10Ｙ R6/2灰黄褐色	弥生後期後葉
19	排水溝北	Ⅸ-b	壺	口縁部	口径（19.0）	小礫　白色粒子	10Ｙ R7/3にぶい黄橙色	弥生後期後葉
20	北	Ⅸ-b	壺	口縁部	口径（13.9）	小礫　白色粒子	10Ｙ R6/3にぶい黄橙色	弥生後期後葉
21	排水溝南	Ⅷ	壺	口縁部		小礫　白色粒子	7.5Ｙ R6/2灰褐色	弥生後期後葉
22	南東	Ⅸ-b	壺	口縁部	口径（16.4）	小礫　白色粒子	7.5Ｙ R7/4にぶい橙色	古墳前期
23	南東	Ⅸ-b	壺	口縁部	口径（21.1）	小礫　白色粒子	7.5Ｙ R6/3にぶい褐色	古墳前期
24		排土	壺	口縁部		白色粒子　石英	10Ｙ R7/3にぶい黄橙色	古墳前期
25		Ⅷ	壺	口縁部		小礫　白色粒子	2.5Ｙ7/1灰白色	古墳前期
26	南西	Ⅸ-a	壺	口縁部	口径（11.4）	白色粒子　雲母	10Ｙ R7/3にぶい黄橙色	古墳前期
27		Ⅷ	壺	口縁部		小礫	2.5Ｙ7/2灰黄色	古墳前期
28	南東	Ⅸ-b	壺	口縁部	口径（10.45）	小礫　白色粒子	10Ｙ R6/2灰黄褐色	古墳前期
29	南東	Ⅸ-b	壺	口縁部		小礫　白色粒子	7.5Ｙ R7/4にぶい橙色	古墳前期
30	南東	Ⅸ-b	壺	口縁部	口径（17.6）	小礫　白色粒子	7.5Ｙ R7/3にぶい橙色	古墳前期
31		Ⅸ-b	壺	口縁部		小礫　白色粒子	10Ｙ R8/2灰白色	古墳前期
32	北	Ⅸ-b	壺	口縁部		小礫　白色粒子	10Ｙ R6/2灰黄褐色	古墳前期
33		Ⅸ-a	壺	口縁部	口径（14.8）	小礫　白色粒子	2.5Ｙ6/1黄灰色	古墳前期
34		Ⅸ-b	壺	口縁部	口径（12.15）	小礫	10Ｙ R7/3にぶい黄橙色	古墳前期
35		Ⅸ-a	壺	口縁部	口径（12.7）	小礫　白色粒子	7.5Ｙ R7/4にぶい橙色	古墳前期
36	南東	Ⅸ-b	壺	口縁部	口径（14.2）	小礫　白色粒子	10Ｙ R7/2にぶい黄橙色	弥生後期後葉
37	排水溝北	Ⅸ-a	壺	口縁部		小礫　白色粒子	2.5Ｙ7/2灰黄色	古墳前期
38	北	Ⅸ-b	壺	口縁部		小礫　白色粒子	7.5Ｙ R6/3にぶい褐色	古墳前期
39		Ⅷ	壺	口縁部		小礫	10Ｙ R7/3にぶい黄橙色	古墳前期
40		Ⅸ-a	壺	口縁部		小礫　白色粒子	10Ｙ R7/2にぶい黄橙色	古墳前期
41	北	Ⅸ-a	壺	口縁部		小礫　白色粒子	10Ｙ R6/3にぶい黄橙色	古墳前期
42		Ⅷ	壺	口縁部		小礫　白色粒子	10Ｙ R7/4にぶい黄橙色	古墳前期
43	排水溝南	Ⅷ	壺	口縁部	口径（18.2）	小礫　白色粒子	7.5Ｙ R6/4にぶい橙色	古墳前期
44		Ⅸ-b	壺	口縁部		小礫　白色粒子	10Ｙ R6/2灰黄褐色	古墳前期
45		Ⅸ-b	壺	口縁部		小礫　白色粒子	10Ｙ R7/2にぶい黄橙色	古墳前期
46		Ⅸ-b	壺	口縁部		小礫　白色粒子	10ＹＲにぶい黄橙色	古墳前期
47		Ⅸ-b	壺	口縁部		白色粒子	10Ｙ R7/2にぶい黄橙色	古墳前期
48	排水溝西	Ⅸ-b	壺	口縁部	口径（12.3）	石英　小礫	5Ｙ R7/6橙色	古墳前期
49		Ⅸ-a	壺	口縁部		小礫　白色粒子	7.5Ｙ R6/3にぶい褐色	古墳前期
50		Ⅷ	壺	口縁部	口径（13.7）	小礫　白色粒子	7.5Ｙ R6/4にぶい橙色	古墳前期
51	南東	Ⅸ-b	壺	頸部		白色粒子	10Ｙ R6/1褐灰色	弥生後期後葉
52		Ⅸ-b	壺	頸部		小礫　白色粒子	2.5Ｙ7/1灰白色	弥生後期後葉
53	竪穴状遺構	覆土	壺	頸部	頸部径（7.9）	小礫	2.5Ｙ7/1灰白色	弥生後期後葉
54	排水溝南	Ⅸ-a	壺	頸部～胴部		白色　灰色粒子	10Ｙ R7/2にぶい黄橙色	弥生後期後葉～古墳前期
55	南西・南東	Ⅸ-b	壺	頸部		白色粒子　石英	10Ｙ R6/2灰黄褐色	古墳前期
56	排水溝東	Ⅸ-b	壺	頸部		白色　灰色粒子	10Ｙ R7/2にぶい黄橙色	古墳前期
57		Ⅸ-b	壺	頸部		白色粒子	10Ｙ R6/2灰黄褐色	古墳前期
58	ＴＰ2	Ⅸ-a	壺	頸部		白色粒子	10Ｙ R6/2灰黄褐色	古墳前期
59		Ⅸ-b	壺	頸部		白色粒子	10Ｙ R6/2灰黄褐色	古墳前期
60	南西	Ⅸ-b	壺	頸部		白色粒子	7.5Ｙ R7/2明褐灰色	古墳前期
61	南	Ⅸ-a	壺	頸部～胴部		白色粒子　灰色粒子	10Ｙ R6/2灰黄褐色	古墳前期
62	北	Ⅸ-b	壺	頸部～胴部		白色粒子	10Ｙ R6/2灰黄褐色	古墳前期
63	南東	Ⅸ-b	壺	頸部～胴部		白色粒子	5Ｙ R6/3にぶい橙色	古墳前期
64	北	Ⅸ-b	壺	頸部～胴部		白色粒子	5Ｙ R6/3にぶい橙色	古墳前期
65		Ⅸ-a	壺	頸部～胴部		白色粒子	7.5Ｙ R5/3にぶい褐色	古墳前期
66	西壁	Ⅸ-a	壺	頸部～胴部		白色粒子	10Ｙ R6/2灰黄褐色	古墳前期
67	南西	Ⅸ-a	壺	頸部～胴部		白色粒子	10Ｙ R7/2にぶい黄橙色	古墳前期
68	竪穴状遺構	覆土	壺	胴部		灰色粒子	2.5Ｙ6/3にぶい黄色	古墳前期
69	排水溝北	Ⅷ	壺	底部～胴部	底径（3.5）	黒色粒子	5Ｙ7/1灰白色	古墳前期
70	南西	Ⅸ-a	壺	底部	底径（4.8）	白色粒子	10Ｙ R7/3にぶい黄橙色	弥生後期後葉～古墳前期
71	南東	Ⅸ-b	壺	底部	底径（6.0）	白色粒子	2.5Ｙ6/1黄灰色	弥生後期後葉～古墳前期
72	攪乱		壺	底部	底径（5.6）	白色粒子　石英　小礫	2.5Ｙ6/1黄灰色	弥生後期後葉～古墳前期
73		Ⅸ-a	壺	底部	底径（7.4）	白色粒子　石英	5Ｙ5/1灰色	弥生後期後葉～古墳前期

表５　出土土器観察表(2)

番号	位置・遺構	層　位	器　種	部　位	法　量	胎　土	色　調	備　考
74		Ⅸ-b	壺	底部	底径（13.0）	白色粒子	10ＹＲ7/3にぶい黄橙色	弥生後期後葉～古墳前期
75		Ⅸ-a	壺	底部	底径（12.0）	白色粒子	10ＹＲ6/3にぶい黄橙色	弥生後期後葉～古墳前期
76	南東	Ⅸ-b	壺	底部	底径（7.8）	石英　白色粒子	10ＹＲ6/2灰黄褐色	弥生後期後葉～古墳前期
77	北	Ⅸ-b	壺	底部	底径（9.6）	白色粒子	10ＹＲ6/2灰黄褐色	弥生後期後葉～古墳前期
78		Ⅸ-b	壺	底部	底径（9.6）	白色粒子　小礫	10ＹＲ7/3にぶい黄橙色	弥生後期後葉～古墳前期
79	南西	Ⅸ-a	壺	底部	底径（9.4）	白色粒子　石英	10ＹＲ6/2灰黄褐色	弥生後期後葉～古墳前期
80		Ⅸ-a	壺	底部	底径（9.7）	石英　小礫	10ＹＲ6/2灰黄褐色	弥生後期後葉～古墳前期
81	南東	Ⅸ-b	壺	底部	底径（7.6）	白色粒子	5ＹＲ6/4にぶい橙色	弥生後期後葉～古墳前期
82		Ⅸ-a	壺	底部	底径（7.6）	白色粒子　石英	7.5ＹＲ6/3にぶい褐色	弥生後期後葉～古墳前期
83	南西	Ⅸ-a	壺	底部	底径（9.8）	白色粒子	8.5Y7/1灰白色	弥生後期後葉～古墳前期
84		Ⅸ-b	壺	底部	底径（11.5）	白色粒子	10ＹＲ6/2灰黄褐色	弥生後期後葉～古墳前期
85	竪穴状遺構	覆土	壺	底部	底径（10.0）	白色粒子	10ＹＲ6/2灰黄褐色	弥生後期後葉～古墳前期
86	排水溝	Ⅸ-a	壺	底部	底径（11.4）	白色粒子　石英	10ＹＲ6/1褐灰色	弥生後期後葉～古墳前期
87		Ⅸ-b	壺	底部	底径（11.4）	白色粒子　石英	10ＹＲ6/2灰黄褐色	弥生後期後葉～古墳前期
88		Ⅸ-b	壺	底部	底径9.2	白色粒子	2.5Y6/1黄灰色	弥生後期後葉～古墳前期
89	南西	Ⅸ-b	壺	底部	底径（10.0）	灰色粒子	7.5Y6/3にぶい褐色	弥生後期後葉～古墳前期
90	南西	Ⅸ-b	甕	口縁部		小礫	10ＹＲ6/1褐灰色	弥生後期後葉
91	東壁	Ⅸ-a	甕	口縁部		白色　灰色粒子	2.5ＹＲ5/4にぶい赤褐色	弥生後期後葉
92		Ⅸ-b	甕	口縁部		小礫　白色粒子	10ＹＲ7/2にぶい黄橙色	弥生後期後葉
93	北	Ⅸ-b	甕	口縁部		石英　小礫	7.5ＹＲ6/4にぶい橙色	古墳前期
94	南東	Ⅸ-b	甕	口縁部		小礫	10ＹＲ7/2にぶい黄橙色	古墳前期
95	北	Ⅸ-b	甕	口縁部		小礫　白色粒子	2.5Y7/1灰白色	古墳前期
96	南東	Ⅸ-b	甕	口縁部		白色粒子	5ＹＲ6/6橙色	古墳前期
97	排水溝西	Ⅸ-b	甕	口縁部		白色粒子　石英	7.5ＹＲ6/4にぶい橙色	古墳前期
98	排水溝西	Ⅸ-a	甕	口縁部		白色粒子　石英	5ＹＲ6/4にぶい橙色	古墳前期
99		Ⅸ-a	甕	口縁部		小礫　石英	10ＹＲ6/3にぶい黄橙色	古墳前期
100	東	Ⅸ-b	甕	口縁部		白色粒子	10ＹＲ7/3にぶい黄橙色	古墳前期
101	南東	Ⅸ-b	甕	口縁部		小礫　石英	5ＹＲ6/4にぶい橙色	古墳前期
102		Ⅸ-a	甕	口縁部		白色粒子　小礫	10ＹＲ6/2灰黄褐色	古墳前期
103	南東	Ⅸ-b	甕	口縁部		白色粒子	10ＹＲ8/3浅黄橙色	古墳前期
104	南東	Ⅸ-b	甕	口縁部		小礫　石英	10ＹＲ6/2灰黄褐色	古墳前期
105	竪穴状遺構	覆土	甕	口縁部	口径（20.4）	白色粒子　小礫	10ＹＲ3/1黒褐色	古墳前期
106	南	Ⅸ-b	甕	口縁部～胴部	口径（21.5）	灰色粒子	7.5ＹＲ5/3にぶい褐色	古墳前期
107		Ⅸ-b	甕	口縁部	口径（14.4）	白色粒子	2.5ＹＲ6/4にぶい橙色	古墳前期
108	南東	Ⅸ-b	甕	口縁部		白色粒子	5ＹＲ5/4にぶい赤褐色	古墳前期
109	北	Ⅸ-b	甕	口縁部		小礫　白色粒子	10ＹＲ4/1褐灰色	古墳前期
110	排水溝東	Ⅸ-b	甕	口縁部		白色粒子	5ＹＲ6/4にぶい橙色	古墳前期
111	東	Ⅸ-b	甕	口縁部		白色粒子　石英	7.5ＹＲ6/2灰褐色	古墳前期
112		Ⅸ-b	甕	口縁部		小礫	7.5ＹＲにぶい橙色	古墳前期
113	攪乱		甕	口縁部		小礫　白色粒子	7.5ＹＲ4/2灰褐色	古墳前期
114	南東	Ⅸ-b	甕	口縁部		小礫　白色粒子	2.5Y橙色	古墳前期
115		Ⅸ-b	甕	口縁部		小礫	7.5ＹＲ5/2灰褐色	古墳前期
116	南東	Ⅸ-b	鉢	口縁部		小礫	7.5ＹＲ7/4にぶい橙色	古墳前期
117	排水溝北	Ⅷ	丸底甕	口縁部～底部	口径（16.4）器高（12.3）	灰色粒子	10ＹＲ6/4にぶい赤褐色	古墳前期
118		Ⅸ-a	受口状口縁甕	口縁部		白色粒子　小礫	10ＹＲ7/3にぶい黄橙色	古墳前期
119	排水溝（東）	Ⅷ	甕	脚部	裾部径（10.6）	小礫　石英	2.5Y7/1灰白色	弥生後期後葉～古墳前期
120		Ⅸ-b	甕	脚部	裾部径（10.2）	小礫　石英	10ＹＲ7/2にぶい黄橙色	弥生後期後葉～古墳前期
121	南西	Ⅸ-a	甕	脚部	裾部径（10.0）	小礫　石英	10ＹＲ6/2灰黄褐色	弥生後期後葉～古墳前期
122	ＴＰ2	Ⅸ-a	甕	脚部		小礫　白色粒子	10ＹＲ7/2にぶい黄橙色	弥生後期後葉～古墳前期
123	西壁	Ⅷ	甕	脚部		小礫　石英	7.5YR7/2明褐灰色	弥生後期後葉～古墳前期
124	北	Ⅸ-b	甕	脚部		小礫　石英	5ＹＲ6/3にぶい橙色	弥生後期後葉～古墳前期
125		Ⅷ	甕	脚部		白色粒子	7.5ＹＲ7/4にぶい橙色	弥生後期後葉～古墳前期
126	排水溝北	Ⅷ	甕	脚部		小礫　白色粒子	10ＹＲ4/2灰黄褐色	弥生後期後葉～古墳前期
127	南西	Ⅸ-a	甕	脚部		小礫　石英	7.5ＹＲ6/3にぶい褐色	弥生後期後葉～古墳前期
128	南東	Ⅸ-b	甕	脚部		小礫　石英	10ＹＲ6/3にぶい黄橙色	弥生後期後葉～古墳前期
129	南西	Ⅸ-b	甕	脚部		小礫　白色粒子	2.5Y6/2灰黄色	弥生後期後葉～古墳前期
130	排水溝東	Ⅸ-a	甕	脚部		小礫　石英	10ＹＲ5/2灰黄褐色	弥生後期後葉～古墳前期
131		Ⅸ-a	甕	脚部		白色粒子	10ＹＲ7/2にぶい黄橙色	弥生後期後葉～古墳前期
132		Ⅸ-b	甕	脚部		白色粒子　石英	7.5YR5/2灰褐色	弥生後期後葉～古墳前期
133	西壁	Ⅷ	甕	脚部		小礫	10ＹＲ5/2灰黄褐色	弥生後期後葉～古墳前期
134	東	Ⅸ-b	甕	脚部		小礫　石英	2.5Y6/1黄灰色	弥生後期後葉～古墳前期
135	南西	Ⅸ-b	甕	脚部		小礫　石英	2.5Y7/1灰白色	弥生後期後葉～古墳前期
136		Ⅸ-b	高坏	坏部	口径10.2	小礫　白色粒子	10ＹＲ5/1褐灰色	古墳前期
137	ＴＰ2	Ⅸ-a	高坏	口縁部	口径（11.5）	小礫　白色粒子	2.5Y7/1灰白色	古墳前期
138		排土	高坏	脚部		白色粒子	10ＹＲ7/2にぶい黄橙色	古墳前期
139	西壁	Ⅷ	高坏	脚部		白色粒子　小礫	10ＹＲ7/2にぶい黄橙色	古墳前期
140	北	Ⅸ-b	高坏	脚部	脚部径（9.2）	小礫	7.5ＹＲ7/3にぶい橙色	古墳前期
141		Ⅷ	高坏	脚部	脚部径（11.05）	小礫	7.5ＹＲ6/1褐灰色	古墳前期
142	北	Ⅸ-b	高坏	脚部	脚部径（6.8）	白色粒子	10ＹＲ7/2にぶい黄橙色	弥生後期後葉
143		Ⅸ-a	小型鉢	完形	口径（11.1）底径（4.6）器高4.2	小礫	2.5Y7/1灰白色	古墳前期
144	排水溝南	Ⅸ-a	鉢	口縁部～胴部	口径（11.1）	小礫　白色粒子	5ＹＲ7/6橙色	古墳前期
145		Ⅸ-a	鉢	口縁部～胴部	口径（12.0）	小礫　白色粒子	2.5Y6/6橙色	古墳前期

2　石製品（第19図１～４　図版13）

石製品は４点出土している。砥石１点、敲石１点、磨石１点、台石１点で機能別に分類すれば、工具（砥石）調理具（磨石、台石、敲石）となり、石斧などの工具、武器、漁労具は出土していない。いずれも瀬戸川層群に属する石材で、軟質な石材である。長尾川や谷津山などで採取されるものである。石材については静岡大学名誉教授伊藤通玄先生のご教示をうけた。



第19図　包含層出土石製品実測図

１は砥石で、欠損している。表裏に砥面が観察される。一部被熱を受け、赤化している。粗粒砂岩製。２は敲石で、竪穴状遺構内から出土している。棒状礫の側縁部に線状痕が観察される。３は磨石で、断面が楕円を呈する扁平な礫を使用している。表裏面の全面に磨面が認められる。４は台石で、扁平な自然礫の表裏面中央にアバタ状の敲打痕が観察される。

表６　出土石製品計測表

番号	名　称	層位・遺構名	石　材	最大長（cm）	最大幅（cm）	最大厚（cm）	重量（g）	備　考
1	砥石	Ⅸ-a	褐灰色細粒砂岩	[5.0]	[1.6]	5	[72.8]	被熱
2	敲石	竪穴状遺構	灰色粗粒砂岩	10	2.6	2	87.2	
3	磨石	Ⅷ	緑灰色凝灰質砂岩	9.6	6.3	2.6	250	
4	台石	Ⅸ-a	灰色粗粒砂岩	31.9	[18.5]	11.2	[9827.2]	

第Ⅳ章　ま　と　め

今回の調査で、小鹿杉本堀合坪遺跡には弥生時代後期～古墳時代前期の遺構が存在することが明らかになった。当初は、隣接する地区で平安時代の条里型地割りの坪界線にのる畦畔が検出されており、坪界線の想定図をもとに灰色粘土層で検出を試みたが、当調査では遺構・遺物は検出されなかった。検出された遺構は竪穴状遺構１基、小穴２基である。時期は弥生時代後期後葉に比定される。竪穴状遺構の性格は不明ではあるが、覆土内から焼土層や炭化した建築材が多く含まれることから、焼失した住居の部材などを廃棄したものと考えられる。

このように周辺には、住居跡や掘立柱建物跡などの集落域が存在していたと考えられる。また、遺跡の中心は、本調査区よりも東側に位置する曲金微高地上に立地していると推定できる。遺跡の始まりは、少なくとも、弥生時代後期後半には集落を形成し、その後古墳時代前期まで継続していたと考えられる。

調査区西側では、平成６年度に県立短期大学建設に伴う発掘調査を行っており、シガラ状遺構、埋設杭などが検出されている。この遺構は弥生時代後期～古墳時代前期と推定している。このことから調査区の西側の後背湿地には水田域、東側の微高地には集落が展開する景観であると考えられる。これまで小鹿微高地においては、弥生時代後期～古墳時代前期の集落は検出されておらず、不明な点が多かったが、弥生時代後期～古墳時代前期の集落が、小鹿微高地にも広がっていることを示した点では、貴重な成果といえよう。周辺の確認調査や遺構・遺物の広がりなどから小黒遺跡のような大集落ではなく、小規模な集落ではないかと考えられる。

出土土器は調査面積が狭いにもかかわらず、テンバコにして５箱分が出土している。弥生時代後期後葉～古墳時代前期の土器の壺・甕が大半を占め、鉢、高坏は少ない。中でも古墳時代前期に比定される土器が包含層から多く出土している。壺は折返し口縁壺と複合口縁壺が多く占め、単純口縁のものは少ない傾向である。また静岡県東部地域の東駿河、静岡県西部地域の東遠江系の土器も僅かながらみられるが、ほとんどが静清平野特有な土器であると考えられる。複合口縁壺には突帯状の粘土帯を巡らせたもの、棒状浮文を貼付したものが特徴的である。甕は、ほとんどが緩やかに外反する口縁部をもつ台付甕で、口縁端部に刻みを入れないものが多い。Ｓ字口縁の甕はみられず、受口状口縁の甕が１点出土しているのみである。

木製品は、竪穴状遺構内から建築材、ヘラ状木製品、刳物容器が出土している。建築材のほとんどが片面に炭化した状況がみられ、ヘラ状木製品や刳物容器が出土していることからも集落に近接した場所といえよう。これらの樹種は針葉樹が多く、スギ材を使用しており、この傾向は、静清平野にみられる他の集落遺跡から出土した木製品と同様である。

石製品は４点出土しており、台石や砥石類である。ほとんどが静岡層群に属する砂岩の石材である。これらの石材は長尾川流域や谷津山・八幡山周辺で採集されるという。静岡層群の石材は瀬戸川層群で採取される砂岩よりやや軟質とされ、弥生時代後期以降になると軟質の砂岩が多く使用される傾向がある。

以上のように調査面積が狭いにもかかわらず、今回の調査で、弥生時代後期後葉から古墳時代前期にかけて多くの土器、木製品が発見され、集落域を想定することができた。より具体的に集落構造や墓域、生産域との有機的関係が明らかになるよう今後の調査に期待したい。

参考文献

日本考古学協会1949『登呂（前編）』
日本考古学協会1954『登呂（本編）』
静岡市教育委員会1982『駿河・豊田遺跡』
静岡県教育委員会1983『有東遺跡』
奈良国立文化財研究所1984『木器集成図録　近畿古代編』
静岡市教育委員会1987『有東梔子遺跡』
㈶静岡県埋蔵文化財調査研究所1989『大谷川Ⅳ』
㈶静岡県埋蔵文化財調査研究所1989『川合遺跡　遺構図版編』
㈶静岡県埋蔵文化財調査研究所1990『川合遺跡　遺構本文編』
㈶静岡県埋蔵文化財調査研究所1992『川合遺跡　遺物編１（土器・土製品図版編）』
㈶静岡県埋蔵文化財調査研究所1992『川合遺跡　遺物編２（石製品・金属製品図版編）』
㈶静岡県埋蔵文化財調査研究所1992『川合遺跡　遺物編２（石製品・金属製品本文編）』
㈶静岡県埋蔵文化財調査研究所1994『川合遺跡　遺物編３（木製品図版編）』
静岡市教育委員会1994『ふちゅーる№２』平成４年度静岡市文化財年報
㈶静岡県埋蔵文化財調査研究所1994『瀬名遺跡Ⅲ（遺構編Ⅲ）』
㈶静岡県埋蔵文化財調査研究所1994『長崎遺跡Ⅲ（遺構編）』
静岡市教育委員会1995『ふちゅーる№3』平成５年度静岡市文化財年報
㈶静岡県埋蔵文化財調査研究所1995『長崎遺跡Ⅳ（遺物・考察編）』
静岡市教育委員会1996『ふちゅーる№4』平成６年度静岡市文化財年報
静岡市教育委員会1996『鷹ノ道遺跡』
㈶静岡県埋蔵文化財調査研究所1996『川合遺跡　遺物編１（土器・土製品本文編）』
㈶静岡県埋蔵文化財調査研究所1996『川合遺跡　遺物編３（木製品本文編）』
㈶静岡県埋蔵文化財調査研究所1996『瀬名遺跡Ⅴ（遺物編Ⅱ）』
㈶静岡県埋蔵文化財調査研究所1996『小鹿杉本堀合坪遺跡』
静岡市教育委員会1997『ふちゅーる№５』平成７年度静岡市文化財年報
静岡市教育委員会1998『ふちゅーる№６』平成８年度静岡市文化財年報
静岡市教育委員会1998『有東遺跡第14次発掘調査報告書』
㈶静岡県埋蔵文化財調査研究所1998『瀬名川遺跡』
静岡市教育委員会1999『ふちゅーる№７』平成９年度静岡市文化財年報
静岡市教育委員会2000『ふちゅーる№８』平成10年度静岡市文化財年報
静岡市教育委員会2000『特別史跡登呂遺跡発掘調査概要報告書』
静岡市教育委員会2001『ふちゅーる№９』平成11年度静岡市文化財年報
静岡市教育委員会2001『特別史跡登呂遺跡発掘調査概要報告書』
静岡県考古学会2002『静岡県における弥生時代集落の変遷』
加納俊介・石黒立人2002『弥生土器の様式と編年　東海編』木耳社

謝　　辞

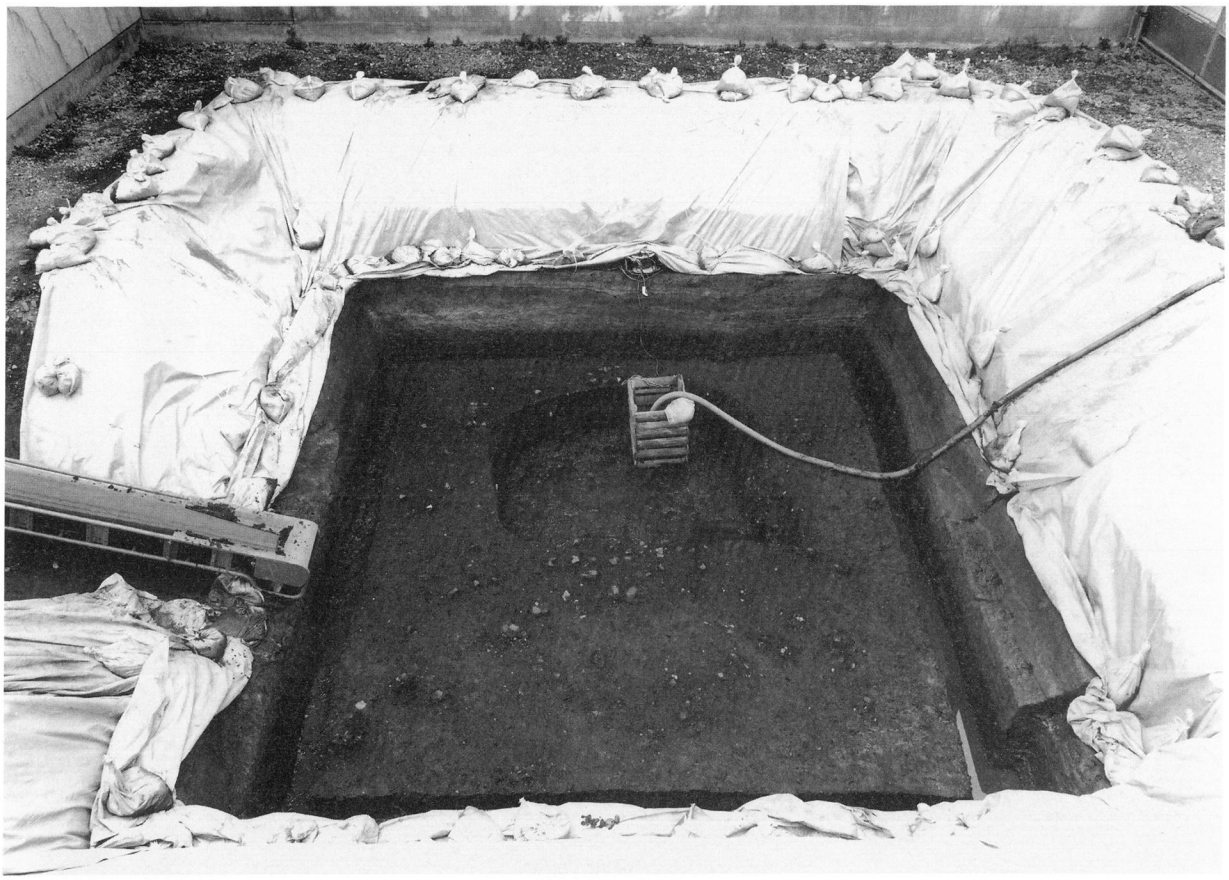
現地調査及び本書の作成にあたって静岡市教育委員会の方々に多くのご協力を頂き、次の方々には有益なご指導、ご助言、ご協力を賜った。ここに記して御礼申し上げる。（敬称略）
伊藤通玄　佐藤洋一郎　篠原和大　中川律子　鈴木悦之　萩野谷正宏

写　真　図　版

1　遺跡遠景（東より）

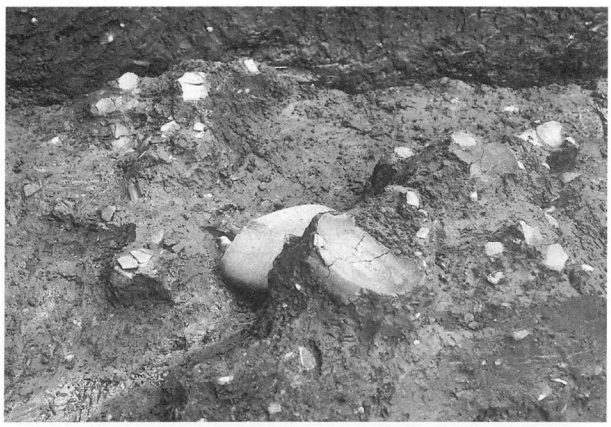
2　調査前全景（北より）

図版 2



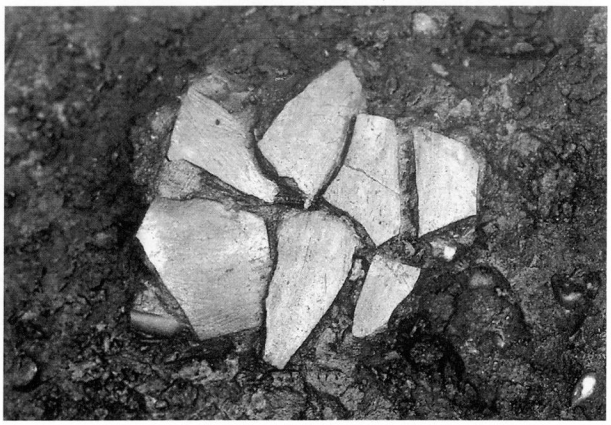
1　調査区全景（北より）

2　包含層遺物出土状況（北より）



3　包含層遺物出土状況（北より）

4　包含層遺物出土状況（北より）



5　包含層遺物出土状況（北より）

1　調査区完掘状況（北より）

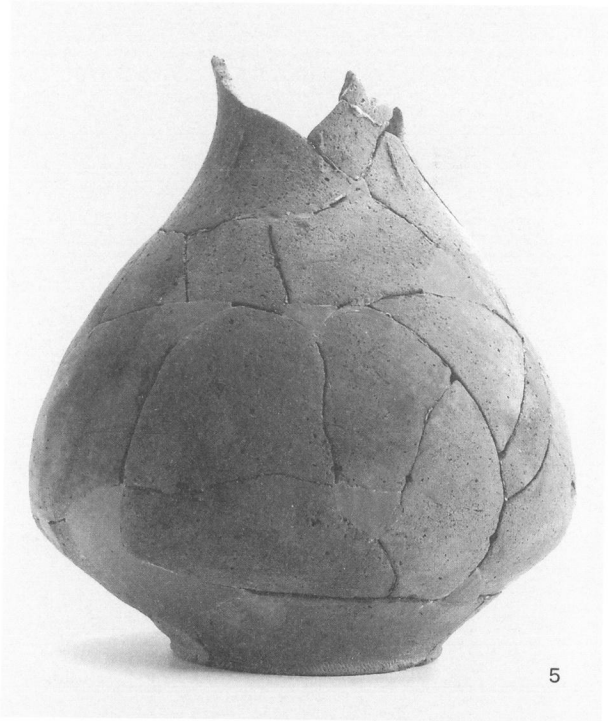
2　竪穴状遺構土層断面（東より）

図版 4

1　竪穴状遺構遺物出土状況（南東より）

2　竪穴状遺構完掘状況（北より）

1


5

52

68

34

12

106

出土土器(1)

図版 6

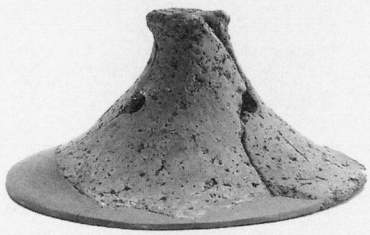
11

69

120

117

136

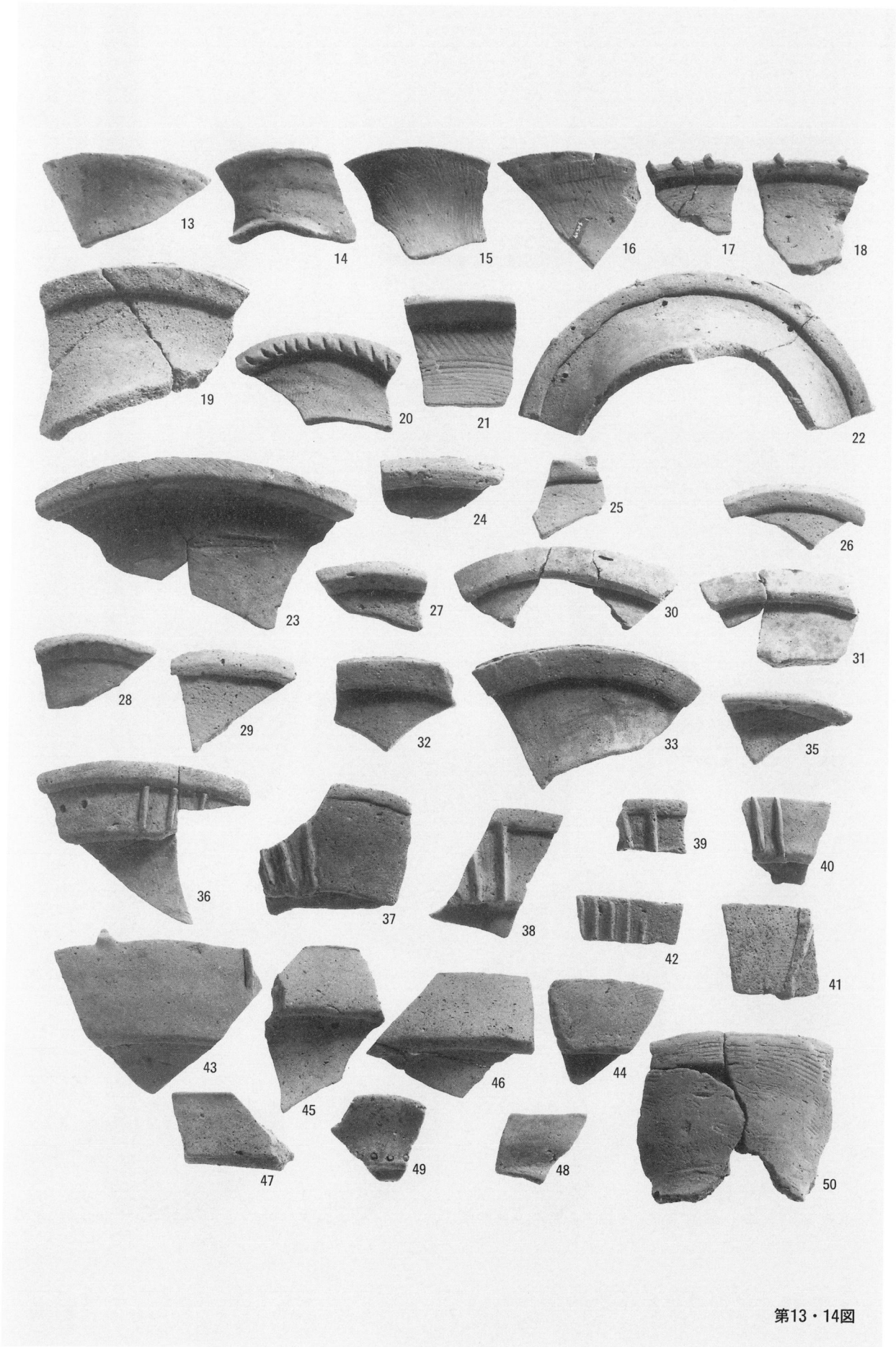


140

143

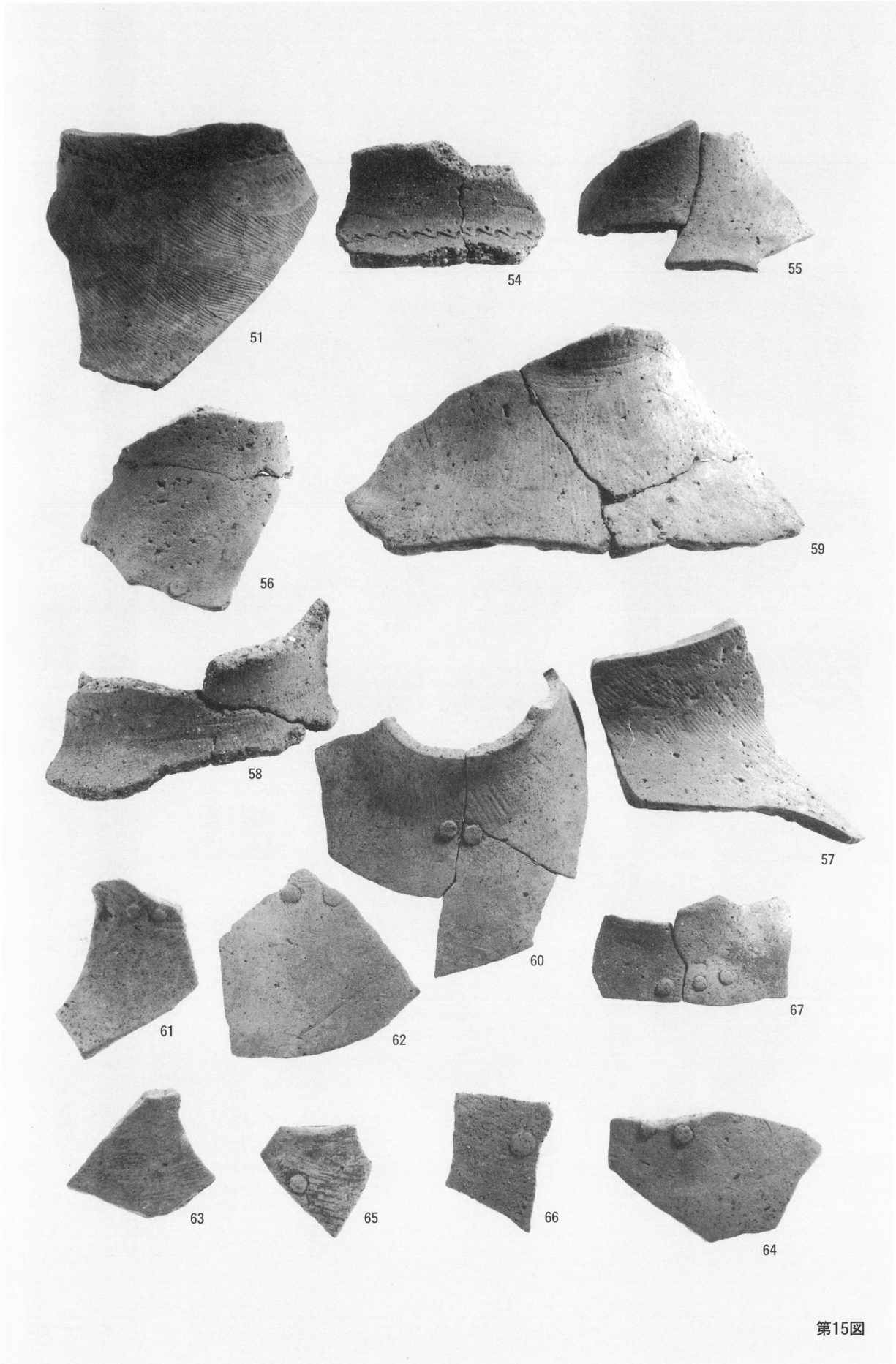
141

出土土器(2)



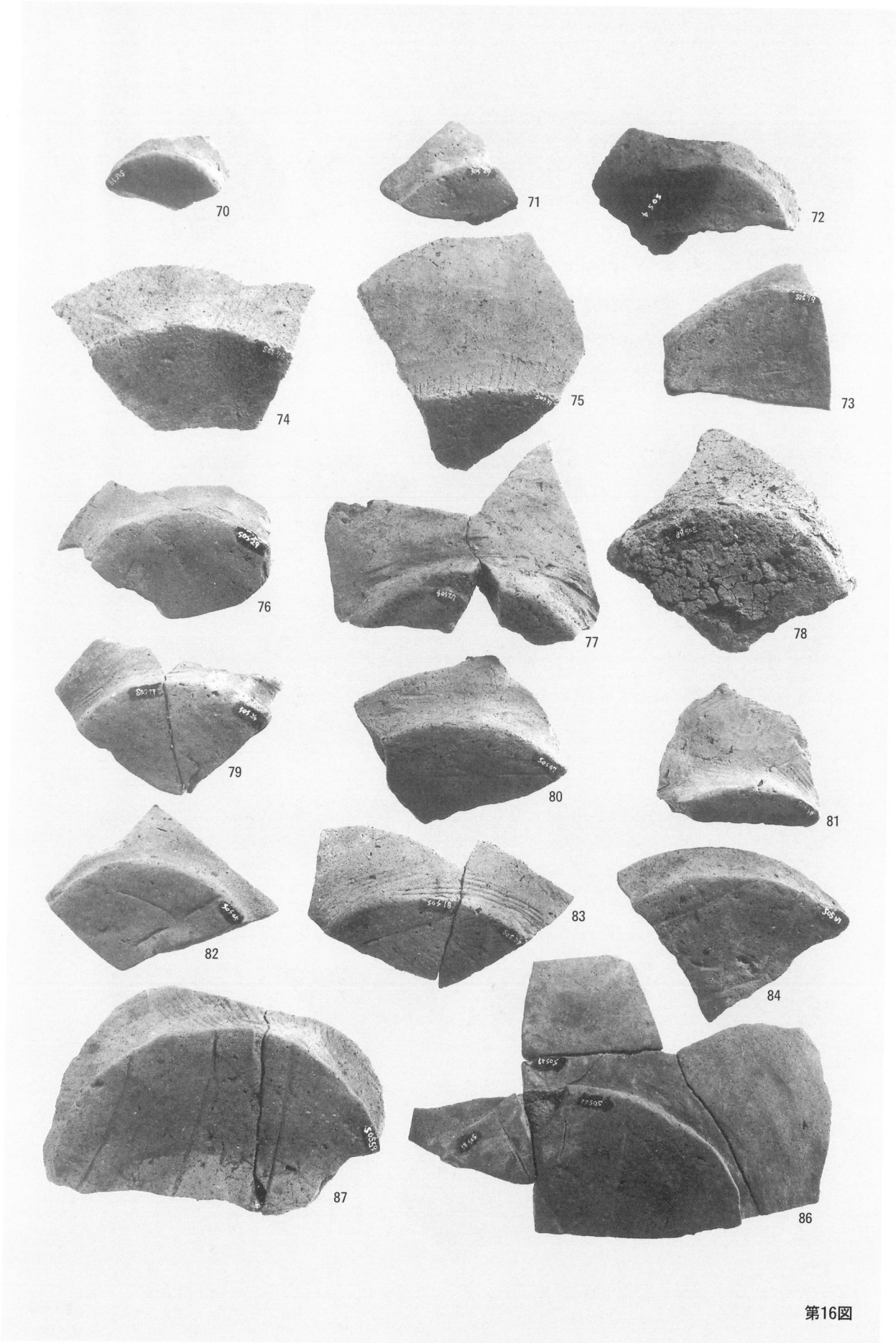
第13・14図

出土土器(3)



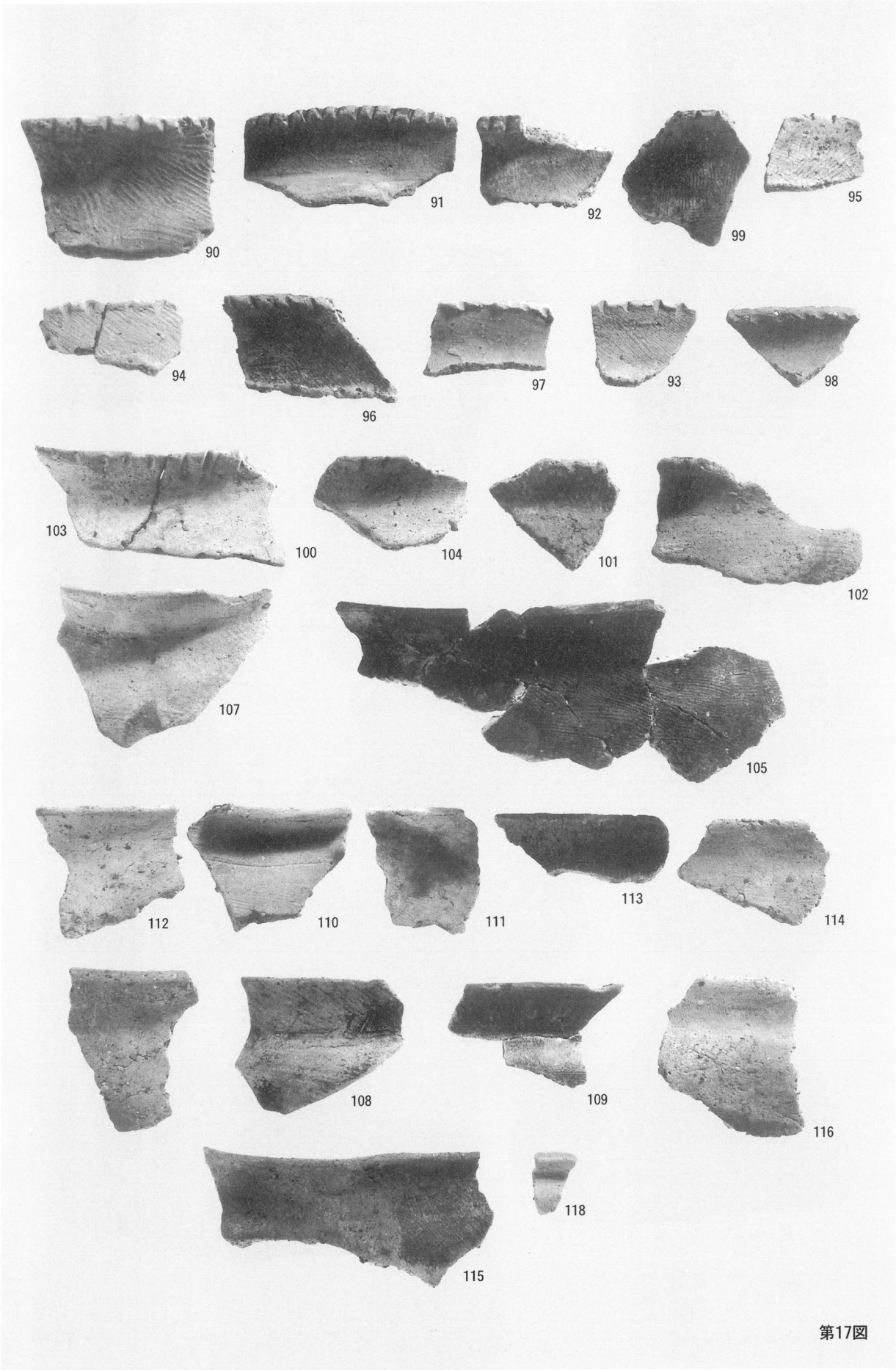
第15図

出土土器(4)



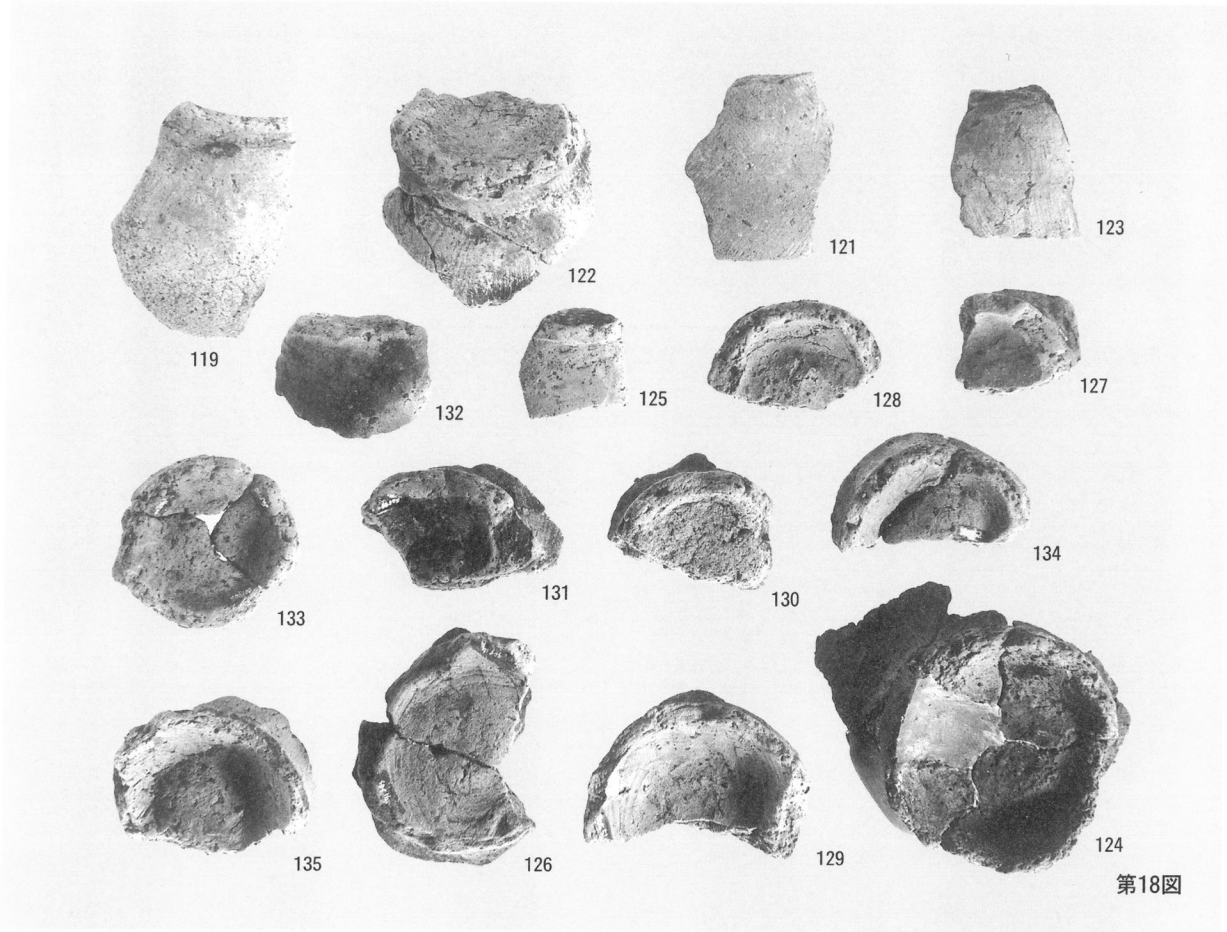
第16図

出土土器(5)

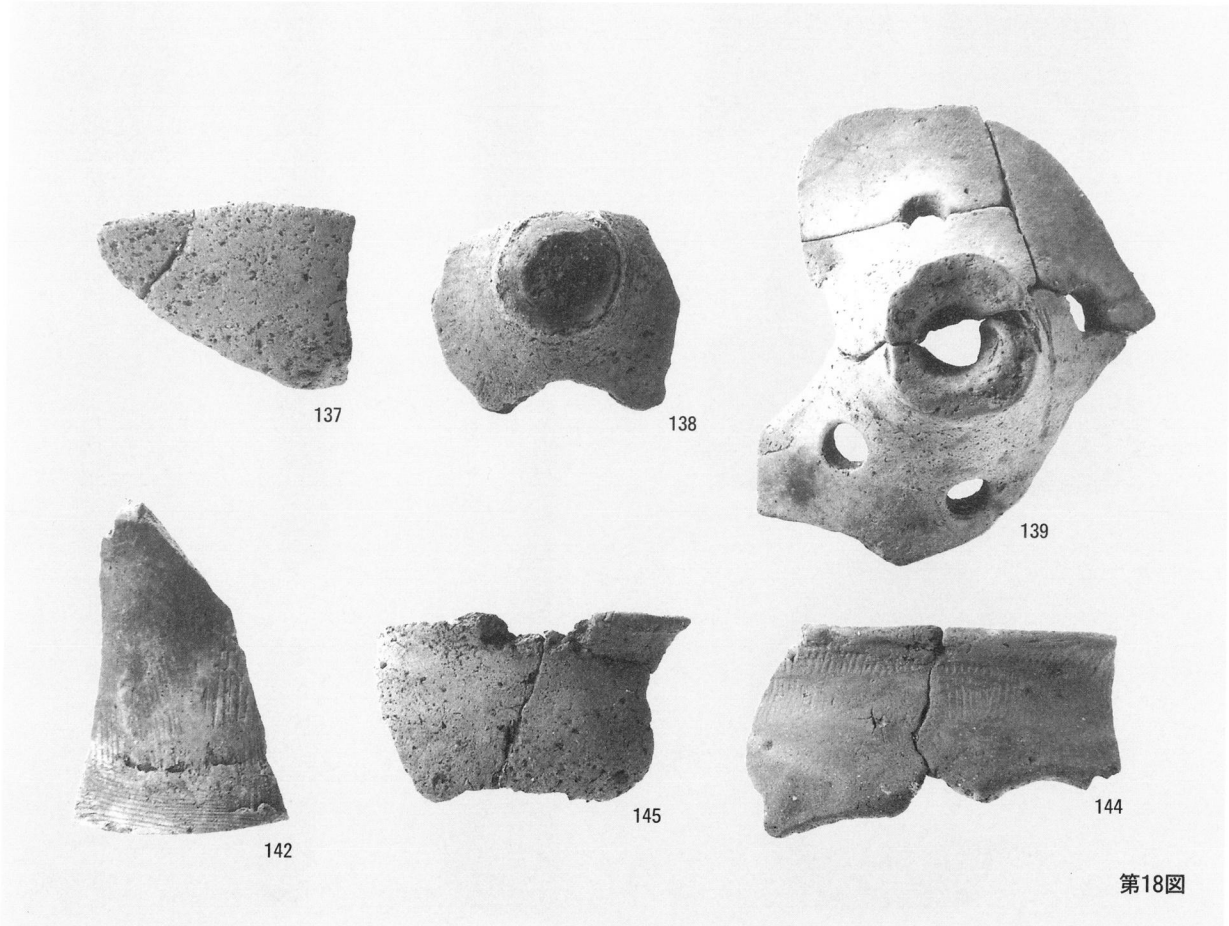

90
91
92
99
95
94
96
97
93
98
103
100
104
101
102
107
105
112
110
111
113
114
108
109
116
118
115

第17図

出土土器(6)

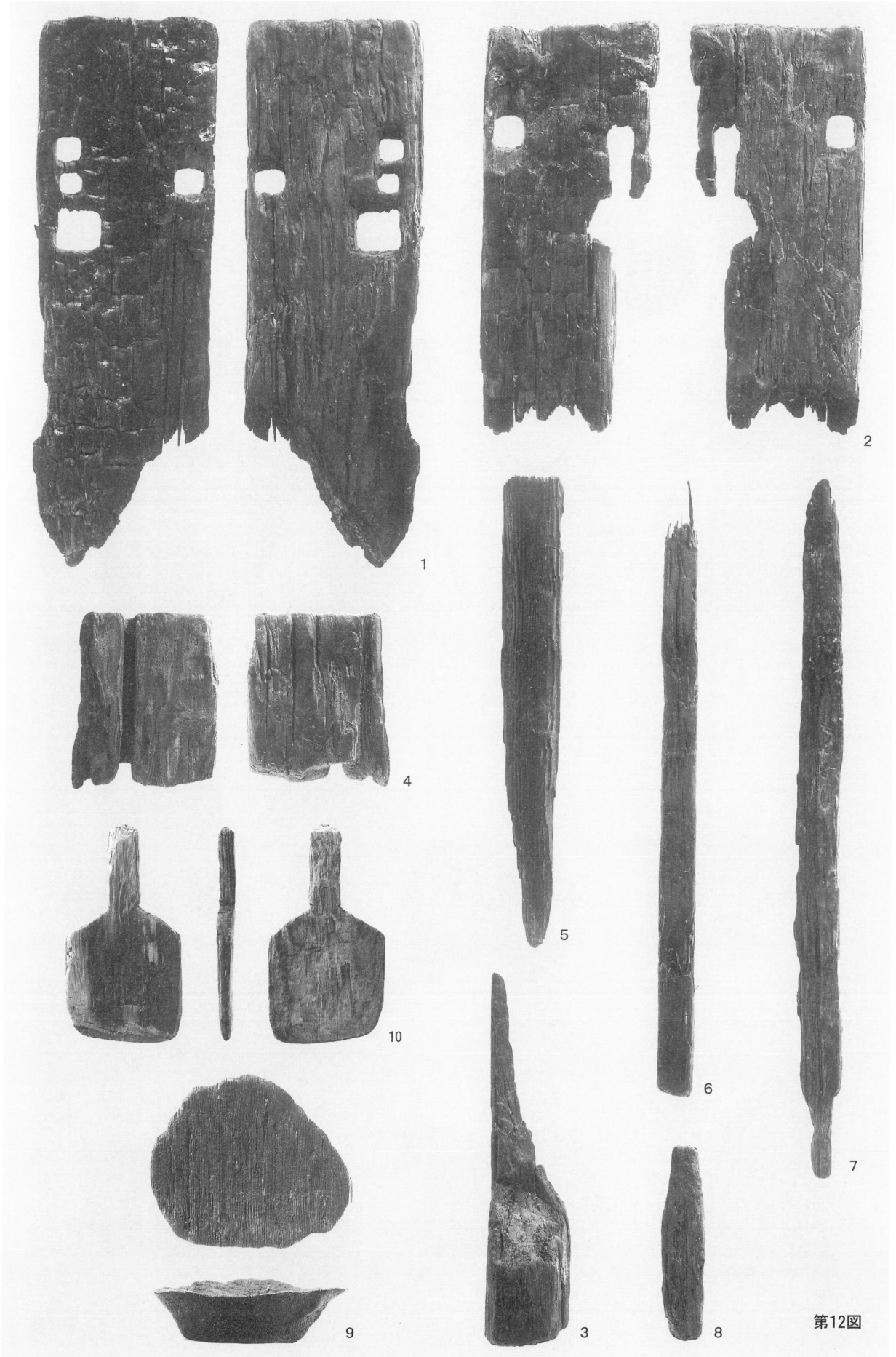


第18図

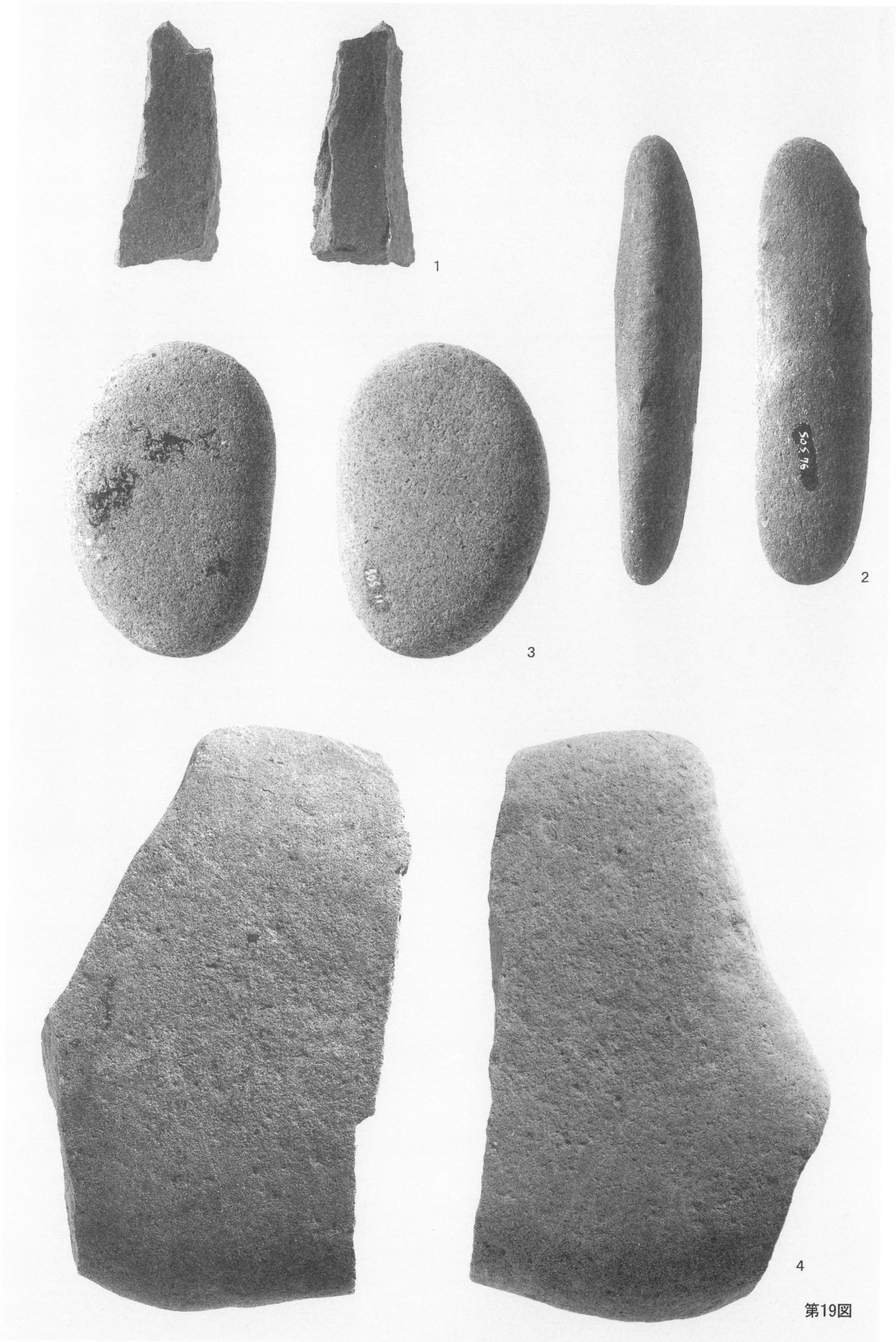


第18図

出土土器(7)



出土木製品



第19図

出土石製品

報告書抄録

ふりがな	おしかすぎもとほりあいつぼいせき
書名	小鹿杉本堀合坪遺跡Ⅱ
副書名	平成13年度　富士白団地埋蔵文化財発掘調査報告書
シリーズ名	静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告書
シリーズ番号	第135集
編著者名	井鍋誉之
編集機関	財団法人　静岡県埋蔵文化財調査研究所
所在地	〒422-8002　静岡県静岡市谷田23-20　TEL054-262-4261㈹
発行年月日	西暦2002年10月31日

ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積	調査原因
小鹿杉本堀合坪遺跡 （おしかすぎもとほりあいつぼ）	静岡県 （しずおかけん） 静岡市小鹿 （しずおかしおしか） 2丁目506-1	22201		36° 05′ 03″	136° 58′ 02″	2002 04 01 ～ 2002 05 31	105㎡	富士白団地埋蔵文化財発掘調査業務

所収遺跡	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
小鹿杉本堀合坪遺跡	集落	弥生時代後期後葉 ～ 古墳時代前期	ピット２基 竪穴状遺構１基	弥生土器 （台付甕　壺　鉢） 土師器 （台付甕　丸底甕 受口状口縁甕 壺　高坏　鉢） 木製品 （建築材３ 棒状木製品５ 刳物容器１ ヘラ状木製品１） 石製品 （砥石１　敲石１ 台石１　磨石１）	周辺に集落遺跡が存在する。

静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告　第135集

小鹿杉本堀合坪遺跡Ⅱ

平成13年度 富士白団地埋蔵文化財発掘調査報告書

平成14年10月31日

発 行 所　財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所
静岡市谷田23-20
TEL(054)262-4261(代)
印 刷 所　みどり美術印刷株式会社
沼津市沼北町２丁目16番19号
TEL(055)921-1839(代)